

平成 28 年度名古屋大学大学院文学研究科

学位（博士課程）申請論文

現代日本語の自発に関する研究

——受身・可能との関連を視野に入れて——

名古屋大学大学院文学研究科

人文学専攻 日本語学専門

高橋 芽衣子

平成 29 年 3 月

目次

序論

1. 本論のねらい	6
2. 本論の構成	8

本論

第1章

他動性スケールにおける受身・自発の位置づけ

——対象変化の程度と意志性に注目して——	10
----------------------	----

1. はじめに	10
2. 自動性・他動性に関する先行研究	10
2.1 Paul J. Hopper and Sandra A. Thompson (1980)	11
2.2 ウェスリー・M・ヤコブセン(1989)	12
2.3 角田太作(1991)	13
2.4 林青樺(2009)	14
3. 他動性の指標としての対象変化の程度	16
3.1 対象変化と受身文との相関	16
3.2 対象変化の程度を軸にした受身と自発の把握	20
4. 他動性の指標としての意志性	21
4.1 意志性と自発文との相関	21
4.2 意志性を軸にした受身と自発の把握	22
5. まとめと今後の展望	23

第2章

ラレル文多義解釈の成立条件

——思考動詞主体〈経験者〉・格表示・話し手の相関——	26
1. はじめに	26
2. 先行研究	28
3. ラレル文の動詞主体・話し手・格表示に注目した分析	32
3.1 〈経験者〉となる人物と格表示	32
3.2 話し手の参与の仕方	36
3.3 多義解釈が成立するラレル文	38
3.4 原則から外れたラレル文における第一主語としての話し手表示率	40
4. まとめ	41

第3章

自発・受身の成立条件

——思考動詞ラレル文ル形のテンス的意味に注目して——	44
1. はじめに	44
2. 思考動詞による態度表明	44
3. 自発・受身解釈の成立条件	48
3.1 対象とするラレル文	48
3.2 自発・受身の人称とテンス的意味	50
4. ラレル文のアスペクト	53
4.1 現象の確認	53
4.2 ル形が表すテンス的意味とアスペクトとの関連	55
5. おわりに	59

第4章

可能動詞による自発表現

——可能動詞の意味分化を契機として発生した可能性について——	63
1. はじめに	63
2. 先行研究	64
2.1 自発と可能の派生関係	64
2.2 可能動詞の用法の分類	65
3. 可能動詞と自発との関連	67
3.1 自発の特徴	68
3.2 可能動詞の諸用法の特徴	68
3.2.1 人称	68
3.2.2 実現性の有無	70
3.2.3 文中における出現位置と解釈	72
4. 可能動詞の自発用法獲得の契機	76
5. まとめと今後の課題	77

第5章

可能動詞「泣ける」による自発表現

——太陽コーパスにおける「泣く」の観察から——	79
1. はじめに	79
2. 『太陽コーパス』における「泣く」の分析	79
2.1 人称	80
2.1.1 「泣く」の人称の様相	81
2.1.2 人称から見る動詞「泣く」の性質	83

2.2 時間限定性	84
2.2.1 動詞「泣く」スル形の用法の様相	84
2.2.2 属性叙述述語としての「泣く」	87
2.3 主体の性質	88
2.3.1 動詞「泣く」主体の性質の様相	89
2.3.2 文章ジャンルとの関係	91
3. 八亀裕美（2007 他）による形容詞の分類	93
4. 可能動詞による自発と状態形容詞	95
4.1 可能動詞「泣ける」自発と状態形容詞との類似性	95
4.2 『太陽コーパス』中の「泣く」に見られる諸特徴との関連	96
4.2.1 事象叙述文	96
4.2.2 「泣く」主体	96
4.2.3 評価の客体	97
4.3 可能動詞「泣ける」が自発を表すようになった背景	99
5. 可能動詞としての「泣ける」と特性形容詞	100
6. まとめと今後の課題	101

結論

1. 本論のまとめ	104
2. 今後の課題	105

初出一覧

1. 本論のねらい

本研究は、自発・受身をはじめとする「(ラ) レル」が後接した文¹の統一的把握を目指して、自発の諸特徴を考察したものである。

現代語のラレル文は、受身、自発、可能、尊敬に解釈される。同一形式でこれほど多様な解釈が成立するのはどのような原理によるものなのだろうか。

中でも特に筆者の関心が高いのが自発である。ここで、自発に関する記述を見て、「(ラ) レル」が後接したものだけでなく、さまざまな形式のものが自発を表すとされていることを確認しておきたい。

松下大三郎 (1974) は「(ラ) ル」が表す動きを、「他から或る動作をされる (p.352)」ことを表す「被動」とする。その中でも自発に相当する述語の意味用法を「自然動的被動」と呼び、「自然動的被動は被動の形式を以てして原動が自然動 (非意志的の動作) であることを表すものである。(p.362)」とする。原動とは、「(ラ) ル」が付かない動きである。文語の例として挙げられたものは、現代語の (ラ) レル形自発と同じであると判断できるが、口語の例として挙げられたものには、可能動詞によるものが含まれている。

(1) a. 泣くまいとしても泣ける。

b. 笑へてしやうがない。

(松下 1974 p.362)

ラレル形の自発とは区別して考えるべきであり、本章ではこの点には触れないが、可能動詞が自発に解釈できることに触れられている点が興味深い。

山田孝雄 (1936) は、(ラ) レルではなく「る」「らる」に関する記述だが、自発について述べている。山田 (1936) によると、「る」「らる」の根本的な意味は受身だが、「それより一轉して自然にその事の現はるゝ勢にあることを示す。今これを自然勢といふべし。(pp.317-8)」とする。自然勢の例として挙げられているものは、現代語のラレル文による自発と同様のものと判断できる。

¹ 動詞未然形+レル・ラレルが述語となる文を、以下、ラレル文と呼ぶ。

(2) 坊主山の早蕨かと怪まる。

(山田 1936 p.317)

松下(1930)とは異なり、可能動詞の形をとるものには触れていない。

時枝誠記(1950)もまた、可能動詞による自発は扱わない。「(ラ)レル」を、「自発或は自然可能を表はす接尾語(p.119)」とし、次のような例を挙げる。

(3) a. 昔のことが思ひ出される。

b. あなたの來るのが待たれる。

(時枝 1950 p.119)

寺村秀夫(1982)は、自発を表す動詞の形として、五段活用動詞の語幹に'-e-(ru)'という形態素がついたものを標準とする。「自発態の形は、可能態の形と、表面的には同じである(p.272)」と述べる。

(4) a. 昨日ノ火事デ、家ガ十軒焼ケタ

b. ガラスガ割レル (音ガスル)

c. ボタンガトレスウダヨ

d. 齒ガ抜ケタ

e. 沖ニ白帆ガ見エル

(寺村 1982 p.271)

対応する他動詞の動作主が意識されない点を自発の本質であるとする。続いて、標準から外れる形で、思考動詞ラレル文による自発を挙げている。

ウェスリー・M・ヤコブセン(1989)は日本語の態について、他動詞文の表す他動原型に対して自発原型というものを定めているが、その際、自発表現という語が用いられている。ヤコブセン(1989)によると、「事態の変化がひとりで主語である対象物に生じる(p.242)」ことを自発表現は表しており、動作主が焦点から外されているという。次の例から分かるように、非意図的な自動詞も含まれている。

(5) a. 自転車のチェーンをはずした。(他動文)

b. 自転車のチェーンがはずれた。(自発文)

(ヤコブセン 1989 p.242)

なお、(ラ) レル型自発には触れられていない。

自発の定義はさまざまになされているが、本論では、ラレル文による自発を典型的な自発として、中心に扱う。受身、尊敬、可能といった、他のラレル文の解釈との比較が可能なおことから、自発の本質への多用なアプローチができると考えられるからである。同様に、可能と比較して分析できる可能動詞による自発も扱う。自発に関する考察を通じて、受身・可能との共通性・連続性を明らかにするねらいである。

2. 本論の構成

第1章では、自発と、同様にラレル文で表される受身との関係を、他動性という観点から、連続体として把握することを試みる。他動性の指標として、対象変化と意志性が取り上げられることが多いが、これらの指標の程度性の違いが、自発と受身を関連付けている可能性について検討する。「(ラ) レル」の後接で表される他の用法と関連付けて把握することにより、自発の特徴をより詳細に明らかにできるのではないか、という試みでもある。

第2章、第3章では、他動性とは異なる観点から、自発と受身の関係を考察する。第2章では話し手・〈経験者〉格、第3章では動詞スル形のテンス的意味に注目して、自発と受身の解釈が決定付けられる要因を探る。解釈の決定要因を明らかにすることが、自発と受身の統一的な把握に繋がると考えるからである。また、その要因の分析を通じて、自発の本質にアプローチする。

第4章、第5章では、可能動詞が自発を表すようになった背景について考察する。第4章では、可能動詞が多様に意味分化したことが契機となっている可能性を述べる。第5章では、可能動詞が用いられるようになった時期における非可能形の様相や文体の特徴から、自発を、形容詞と関連付けて把握する。「(ラ) レル」の後接によらない形式の自発用法ではあるが、典型的な自発文との類似性を探ることにより、現代語自発の特徴に迫ることができる可能性がある。

参考文献

- ウェスリー・M・ヤコブセン(1989)「他動性とプロトタイプ論」、久野璋、柴谷方良編『日本語学の新展開』くろしお出版 pp.213-48
- 寺村秀夫 (1982)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 時枝誠記 (1950)『日本語文法 口語篇』岩波書店
- 松下大三郎 (1974)『改撰標準日本文法』勉誠社
- 山田孝雄 (1936)『日本文法學概論』宝文館出版

他動性スケールにおける受身・自発の位置づけ

——対象変化の程度と意志性に注目して——

1. はじめに

現代語において、動詞の未然形に「(ラ) レル」が後接した形式¹で、受身や自発が表される。その受身・自発を、他動性・自動性という観点から、ヴォイス体系の一部として理解することを試みる。受身を表す受動態は能動態と対立しているという考えが、ヴォイスの基本であるといえる。しかし受身と自発は、同じ(ラ) レル形式を伴う構文である。この二つの構文について統一的に把握するため、他動性・自動性の指標のうち、特に対象変化と意志性に注目して検討する。

2. 自動性と他動性に関する先行研究

自動性・他動性とは、動詞の自他をはじめとするヴォイス体系を分析する際に用いられる概念である。

〈動作主〉〈対象〉をとる他動詞の多くは、〈動作主〉による〈対象〉への働きかけを意味する。しかし、他動詞であるからといって、必ずしも〈対象〉に対して、変化・影響を及ぼすような働きかけを表すわけではない。また、〈動作主〉〈対象〉が異なる存在であるとも限らず、再帰的な表現の場合、参加者が一人となることもある。自動詞は、多くの場合、参加者が一人もしくは一個体である。

- (1) 花子が太郎を殴る。
- (2) 花子が手紙を破る。
- (3) 太郎が花子を見つめる。

¹ 動詞未然形+レル・ラレルが述語となる文を、以下、ラレル文と呼ぶ。

(4) 太郎が胸を痛める。

(5) 太郎が泣く。

(1)～(4)は、〈動作主〉〈対象〉をとる他動詞、(5)は〈動作主〉しかとらない自動詞である。他動詞の中でも、(1)や(2)のように〈対象〉に対して大きな変化・影響を及ぼすものもあれば、(3)のように〈対象〉に変化をもたらさないものもある。また、(4)のように、〈対象〉をとるが、参加者は「太郎」のみであるものもある。

他動詞文でも、〈動作主〉による〈対象〉への働きかけを表さないことがあり、参加者が一人の人物でも、自動詞文とならないこともある。ヴォイス体系の分析には、動詞の自他という形態的特徴からだけでなく、意味の面からの考察も欠くことはできない。その際に用いられるのが他動性²という概念である。

2.1 Paul J. Hopper and Sandra A. Thompson (1980)

Hopper and Thompson (1980) は、A～J の指標を設定し、それぞれの程度について、高いと判断されるものが多ければ多いほど、その構文はより高い他動性を有するものであるとする。E. VOLITIONAILITY が意志性、I. AFFECTEDNESS OF O が目的語の影響性を表し、他動性についてこの二つの指標を設定していることに注目したい。なお、Hopper and Thompson (1980) が述べているのは他動性の高低である。

² 他動性に対する概念として自動性というものが考えられている。他動性と自動性の関係については、同一の軸の両端に位置し、連続体をなすが対立するもの、異なるスケールにおいて、それぞれ程度性を有するものなど、さまざまな把握がなされている。詳細は 2.1 以降で適宜触れる。

	HIGH	LOW
A. PARTICIPANTS	2 or more participants, A and O	1 participant
B. KINESIS	action	non-action
C. ASPECT	telic	atelic
D. PUNCTUALITY	punctual	non-punctual
E. VOLITIONALITY	volitional	non-volitional
F. AFFIRMATION	affirmative	negative
G. MODE	realis	irrealis
H. AGENCY	A high in potency	A low in potency
I. AFFECTEDNESS OF O	O totally affected	O not affected
J. INDIVIDUATION OF O	O highly individuated	O non-individuated

(Hopper and Thompson 1980 p.252)

2.2 ウェスリー・M・ヤコブセン(1989)

ヤコブセン（1989）は、他動性だけでなく、自動性の原型についても言及している。

(6) 他動原型の意味特徴

(a) 関与している事物（人物）が二つある。すなわち、動作主(Agent)と対象物(Object)である。

(b) 動作主に意図性がある。

(c) 対象物は変化を被る。

(d) 変化は現実の時間において生じる。

ヤコブセン(1989 p.217)

(7) 自動原型の意味特徴

(a) 関与している事物（人物）が一つある。すなわち、対象物(object)である。

(b) 対象物は変化を被る。

(c) 変化は現実の時間において生じる。

ヤコブセン(1989 p.239)

「(自分の) 腰を曲げる」という他動詞表現は再帰性を持つ。関与物が一つであるという点で、対象物が変化を被るような、他動性の高い文とは区別される。また、「走る」「飛ぶ」などの意志的自動詞もまた、動作主の意図的行為によって動作主自身に位置変化などの影響を及ぼすという再帰的な動きであるといえる。ヤコブセン(1989)は他動原型と自動原型について、動作主・対象物という二つの関与物をとる他動詞と、動作主が存在しない非意志的自動詞とを両端とした連続体をなすものであると述べる。ヤコブセン(1989)もまた、他動性の指標として、対象の変化と意図性とを取り上げている点に注目すべきである。

2.3 角田太作 (1991)

角田 (1991) では、日本語だけでなく世界の諸言語にも共通する意味的な他動性の原型を、次のように定めている。

(8) 他動詞の原型：

相手に及び、かつ、相手に変化を起こす動作を表す動詞。 (p.72)

その上で、他動性の原型が持っている文法的な諸特徴を形の側面として指摘する。

(9) a. 「が - を」構文

b. 直接受動文

c. 関節受動文

d. 再帰文

e. 相互文 (pp.76-81)

原型的他動詞文であれば(9) に挙げた文を作ることができる。原型的な他動詞に近い「叩く」は、(10a)～(10e)のように変換できる。

(10) a. 太郎が花子を叩いた。

b. 花子が太郎に叩かれた。

c. 私は太郎に花子を叩かれた。

d. 太郎が自分（または、自分自身）を叩いた。

e. 太郎と花子が（お互いを）叩き合った。 (pp.76-81)

「飛行士が宇宙を飛んだ」や「太郎に英語が分かる」等は、動作が相手に及ばず、変化も起こさない。他動詞の原型から外れており、(9a)～(9e)の文に変換しにくいことを確認している。文の変換可否が、他動性の程度の尺度になるという。

なお角田(1991)は、意味的な他動性の原型に意志性を含んでいない。相手に変化を及ぼす動きであっても、それが必ずしも動作主の意志によって生起するとは限らない。また、意志的な動きを自動詞で表すことがある。それ故、意味的な他動性の原型と意志性は無関係であるとする。

(11) 花子が太郎を突き飛ばす。

(12) 太郎が転ぶ。

(13) 花子が走る。

具体的な考察や積極的な定義は見られないが、他動性と自動性を、同一軸の両端に位置するものではないかもしれないと考えている点でも、角田(1991) は特徴的³である。

2.4 林青樺(2009)

他動性が低下したものが自動性であり、連続体を成すものであるという従来の研究とは異なり、林(2009) は、他動性と自動性が異なる軸上に位置づけられるものである可能性を示唆する。

まず、他動性を「事象に関与する事物が二つ(A,B)あり、構文の主語(A)が他者(B)へ具体的にまたは抽象的に働きかけるという遠心的な方向性を持つ(p.151)」ものと定義する。その上で、直接受動文は他動性が高い文から作られやすいことを根拠に、直接受動文になら

³ 角田 (1991、2009) では、他動性と自動性が異なる軸に位置づけられる可能性に触れながら、動作・変化・状態を表す3種の自動詞文が、原型的他動詞文を取り囲む形で位置づけられるかもしれないと述べる。また、原型的他動詞と原型的自動詞が同じ軸を成すかどうかは別にして、自動性が他動性と逆の性質を持つと考え、自動性の原型は状態であると把握できる可能性も指摘する (角田 2009)。

ない、すなわち他動性の低い自動詞文を対象とし、自動性のあり方を分析している。自動詞文で表される事象が生起する要因には、主語の内部に存在する「意志性」「内在的性質」「内的要因」という《内在的ファクター》、主語の外部に存在する「外的要因」「潜在的動作主」という《外在的ファクター》がある。これらの要因によって自動詞をグループに分けると、非他動的である動きもまた、Ⅰ〈自力型自動性〉からⅤ〈受身型自動性〉まで、連続的な動きとして把握できると述べる。

事象の生起に関わる諸要因から見た自動詞のグループ分け

要因の内実	Ⅰ：意志性	太郎が走った／花子が躍った／子供たちが遊んだ／友達が来た…等。
	Ⅱ：内在的性質	草が生えた／木が倒れた／お年寄りが転んだ／紙が破れた／縄が切れた…等。
	Ⅲ：内的要因	彼女が妙な感覚にとらわれた／私は悪夢にうなされた／彼女が不眠症に悩んだ／太郎が長年の病気に苦しんだ／私は自分の気持ちに驚いた…等。
	Ⅳ：外的要因	彼が金銭にとらわれた／髪が雨に濡れた／彼が生活に困った／僕がその気配に気圧された／世界中がその技術に驚いた／僕は隣人の騒音に苦しんだ…等。
	Ⅴ：潜在的動作主	財布が見つかった／木が植わった／病人が助かった／資金が集まった…等。

※下線部は用法によって要因の内実が異なる自動詞をさす。

林(2009 p.157)

このなかで林(2009)は、Ⅴの動詞に見られるような自動性を〈受身型自動性〉と呼び、これを、潜在的動作主が存在し、自動性が弱まっていることから周辺的な自動性と位置づけている。ただ、自動性が弱まっているものの他動性を伴う表現ともいえないとし、他動性と自動性が一つの軸を成しているという考えに懐疑的である。

3. 他動性の指標としての対象変化の程度

3. 1 対象変化と受身文との相関

他動性の分析において、受身文としての成り立ちやすさに言及したのが角田(1991)である。角田(1991)は、2.3 でも見たが、他動性が高く、原型的他動文に近いものは、直接・間接受身文になるという。

他動性に関する記述ではないが、村木新次郎(1991)においても、受身文として自然なものとなりやすいのは、動作主の動作だけでなく対象の結果を含意する動詞を用いたものであるとし、次の例を挙げている(p.189)。

(14) ドアは こわされた。

(15) ドアは けられた。

(14)「こわす」は、〈対象〉「ドア」の変化結果までを表す動詞だが、(15)「ける」が表すのは対象物への働きかけまでで、変化は含意しない。(14)(15)の受身文に見られる自然さの違いは、運動の種類の違いによるという。受身になる動詞が変化結果を含意するということは、その動詞の他動性が高いということになるだろう。

前節までの整理でも明らかなように、受身は、他動性が高い動詞において成り立ちやすいものであるといえる。その一方で、工藤真由美(1995)、影山太郎(1996)では、変化結果まで含意していない動詞であっても、村木(1991)で見たような自然さの差について言及されることなく、受身文として成立するとされている。ところが、変化結果を含意する動詞と含意しない動詞には、受身文の成立状況に違いが見られる。そこで本節では、まず他動性の指標の一つとして受身化に注目し、変化結果という概念を、受身が表すとされる受影性と関連付けて考察することで、受身文成立の自然さには変化結果を表すという動詞の性質が強く影響していることを述べる。

動詞「倒す」「選ぶ」を分析の対象とする⁴。「倒す」は、対象物への働きかけから、「倒れる」という〈対象〉の変化結果までを含意する動詞である。一方「選ぶ」は、〈対象〉の変

化まで表さない。より明確な変化結果を表す、すなわち他動性の高い動詞に「壊す」「破る」等があるが、〈対象〉が事物にほぼ限定されてしまう。受影性と関連付けた考察には、〈対象〉が有情物か非情物かという観点からの分析が必要であり、事物だけでなく人物も〈対象〉となる動詞でなければならない。なお、いずれも該当する動詞を後部要素とする複合動詞を含む。

「倒す」「選ぶ」動詞文における〈対象〉の有情物／非情物の割合は、表①で示される。「倒す」では有情物、「選ぶ」では非情物の割合が高い。なお、この結果は「倒す」「選ぶ」動詞述語文全体におけるものであり、ラレル形となった受身文も含まれる。以下にそれぞれ例を挙げるが、〈対象〉は□で表示する。

表① 〈対象〉の有情物／非情物割合（全動詞述語文）

〈対象〉 \ 動詞	「倒す」	「選ぶ」
有情物	105(63.3%)	132(30.6%)
非情物	61(36.7%)	296(69.3%)

- (16) 俺は起き上り、老婆をいきなり突き倒した。(金閣寺) [有情物]
- (17) 口の中で二、三度もごもごと呟くと、大先生は手帳をテーブルに伏せたまま、シートを倒していびきをかきだした。(風に吹かれて) [非情物]
- (18) 父があなたを、一人娘の夫に選ぶに際して、どれほど慎重に選択吟味したかをお知りになったら、きっと驚かれることでしょう。(錦繡) [有情物]
- (19) 私は初めて見知らぬ道を選んだことを後悔した。(野火) [非情物]

一方、動詞「倒す」「選ぶ」受身文に限定した場合、表②で見るように割合に変化が生じる。ここで述べる〈対象〉とは、能動文の場合と同様のものを指す。能動文では目的語として現れ、受身文では多くの場合、主語となるものである。

⁴ テキストは『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』を使用。ただし、翻訳作品は除く。

表② 〈対象〉の有情物／非情物割合（受身文）

〈対象〉\動詞	「倒す」	「選ぶ」
有情物	27(71.1%)	38(80.4%)
非情物	11(28.9%)	8(19.6%)

- (20) 勝子が男の児に倒された。(勝子) [有情物]
- (21) 驚いたことに、駅続きの家という家が殆どみなぺたりと地に倒されて、そこらじゅう地面を瓦の波で覆っている。(黒い雨) [非情物]
- (22) (略) 現代アメリカを代表する科学者が各分野から一人ずつ選ばれ紹介されていたが、数学界からは彼が選ばれており、説明には彼が水爆の生みの親であると記されてあった。(若き数学者のアメリカ) [有情物]
- (23) この特性によって、砂だけが、とくに土のなかから選ばれて、流れと直角の方向に吸い出される。(砂の女) [非情物]

「倒す」「選ぶ」いずれにおいても、〈対象〉が有情物となる割合が高い。しかし、動詞述語文全体における結果の表①と比較すると、特に「選ぶ」において、有情物を〈対象〉とする受身文の割合増加は著しい。この点に関して、動詞の他動性と、受身文が表す受影性⁵とを関連付けて考察を進める。

日本語に固有の受身⁵は、受影性を表すとされる（金水敏 1993）。「倒す」「選ぶ」は、〈対象〉の変化を含意するか否かという違いはあるが、〈対象〉への働きかけは含意する。その性質故、どちらの動詞が用いられた受身文であっても、固有の受身文であると判断できる。

〈対象〉である受身文主語が非情物の場合においても、金水（1991,1993）による非情の固有の受身における主語と二格名詞句間の意味的制約⁶を冒していない。

⁵ 受影性を表し、行為者が二格表示される。一方非固有の受身文は、欧文翻訳体の影響で近代以降に生じたもので、受影性を表さないため、作成動詞の対象も受身文主語になり得る。行為者はニヨッテで表示される。

⁶ 客観的描写であれば、受影性を表す受身文も非情物を主語にとり得る。ただしその場合、主語と二格名詞句との間に次のような制約があるとする。

主語	旧主語表示
a 〈非人格的〉	(なし)
b 〈非人格的〉	〈非人格的〉ニ
c 〈非人格的〉	〈人格的〉／〈非人格的〉ニヨッテ
d * 〈非人格的〉	〈人格的〉ニ

〈対象〉がどうなったかという変化結果を含意する動詞、つまり他動性の高い動詞の方が、〈対象〉が影響を受けたことを明確に表現する文となる。動詞「倒す」は、〈対象〉への働きかけを表すが、実際には働きかけだけでなく、〈対象〉の変化も伴う。「倒す」という動きの実現には、〈対象〉が「倒れる」という事象の成立が必須である。〈対象〉が有情物であれば、「倒す」という動きによって受ける影響を、その有情物が直接知覚すると考えられるし、非情物であっても、その物が「倒れる」という状態変化を起こしていれば、「倒す」という動きによって引き起こされた事態が客観的に表現されることとなる。他動性が低い動詞「選ぶ」では、〈対象〉が有情物であれば何らかの働きかけを感じる可能性はあるが、非情物の場合、「倒す」とは異なり、視覚的に把握することはできず、客観的描写が困難である。「倒す」のように対象の明確な変化結果を含意するものであれば、〈対象〉が非情物であっても受身文によって対象変化を描写したり、潜在的受影者が対象変化を知覚したものとして表現したりできる。しかし、「選ぶ」のように受身文主語となる〈対象〉への影響が分かりづらい、すなわち他動性が低い動詞だと受影性を表しにくくなるので、受身文全体において、〈対象〉に非情物をとることが少なくなる。

e 〈人格的〉 〈人格的〉ニ
f * 〈人格的〉 〈人格的〉／〈非人格的〉ニヨッテ (金水 1991 p.12)

表③ 動詞述語文全体における受身文の割合

	「倒す」	「選ぶ」
動詞述語文	166	428
受身文	38(22.9%)	46(10.7%)

変化を及ぼすという他動性が高い動詞文は、影響を表す受身文として成立することが相対的に多いといえる。対象変化を及ぼすとはいえない動詞「選ぶ」は、受身文で表現されることが少ない。〈対象〉を主語にとる受身において主眼が置かれるのは、〈対象〉の変化である。しかし、受影性を表すという受身文の性質により、変化までは含意しない働きかけを表す動詞であっても成立していると考えられる。対象変化を含意しない「選ぶ」が受身になる際に、対象として有情物の割合が高くなるのは、〈対象〉が非情物だと受身の性質になじまないからであると考えられる。

以上、他動性の指標の一つである対象変化の程度が、受身文の成り立ちやすさに影響している様子を見た。受影性を表す受身に関して、対象変化の程度という他動性の指標は、分析に有効であるといえる。

3.2 対象変化の程度を軸にした受身と自発の把握

他動性の高さと受身文としての成立可否には、対象変化の程度に注目した場合、何等かの相関がありそうである。では、対象変化の程度という指標で、受身と自発を統一的に把握することはできるだろうか。

対象変化の程度が大きい、つまり、他動性が高い動詞ほど、受身文として成り立ちやすい。一方自発は、現代語においては内的な思考動詞に限られるので、能動文として見た場合の対象変化の程度は低い。

(24) 私には、太郎が懐かしく思い出される。

(25) 私には、あの日のことが懐かしく思い出される。

(24) で「思い出される」のは「太郎」という有情物であるが、(25) では「あの日のこと」という非情物である。だが、たとえ有情物であっても、「太郎」自身に変化が生じたわけで

はないので、他動性は低い。この点は 3.1 で見た「選ぶ」と同様だが、「選ぶ」と比べると、有情物である〈対象〉そのものが動きの完了を実感できるかできないかという違いがあるように感じられる。

(26) 太郎が懐かしく思い出された。

(27) 太郎がリーダーに選ばれた。

(26) の「思い出された」では、話し手の内的な事態であるため、「太郎」自身が「思い出された」ことを実感することは難しい。しかし、(27) では、「選ばれた」まさにその瞬間に「太郎」が立ち会っていれば、「太郎」自身が「選ばれた」ことを実感できる。その時点において、「太郎」は自分が「選ばれた」ことを実感するという変化が生じているといえる。「思い出す」は、対象変化までは含意しないという点で「選ぶ」と共通するが、〈対象〉自身が実感できないという点に注目すると、「選ぶ」より他動性が低いと考えられる。

現代日本語の自発は内的な思考動詞に限られる。そのような動詞で表される動きは内的であるが故に、「思い出す」のように対象の実感を伴いにくい。つまり、対象変化の程度が非常に低いといえる。

典型的な受身として成立しやすいのは対象変化の程度が高い動詞で、典型的な自発は、対象変化の程度が低い動詞から成立する。受身と自発は、対象変化の程度という他動性を軸に把握することができそうである。

4. 他動性の指標としての意志性

4.1 意志性と自発文との相関

受身と同じくラレル文によって表される自発に関しては、その構文的意味から、意志性という指標に注目したい。

森山卓郎(1989) は自発を、能動態とは異なる立場から事態を述べる受身とは違い、自然にそうなるという意味・ニュアンスを持つものであると述べる。尾上圭介(1998)もまた、「動作主がそうしようとしたわけではないのに思わずそうしてしまう(p.91)」ものであるとする。他動性・自動性と意志性との関係には諸説あるが、自発文に関しては、動作主の非意志的な

動きを表すものであると考えられることが多いといえる。

さらに、その非意志的な動きの生起は、外的条件を要因としていると考えられている。渋谷勝己(1993)が設定した「可能の条件スケール」においては、動作主体の外部に動作実現のための条件が存在し、その外部条件が動作主体の意志の介入を許さないものが外的強制条件、すなわち自発とされる。

(28) あの山を見るといつも故郷のことが思い出される。 (p.28)

能動文と自発文、自動詞文を連続的なものであると把握する柴谷方良(2000)も、自発は「動作主は関与するが、事態生起の根源は動作主の意志でなく、外的要因にある(p.169)」と述べる。

ところが、杉本和之(1997)には次のような記述が見られる。杉本(1997)は、共起成分から様々な動詞の意志性を計っているが、現代日本語においてラレル形が自発となる典型的思考動詞「思う」「感じる」「思い出す」等は無意志動詞に分類される。動作主の非意志的な動きを表すものであると考えられる自発は、能動文の段階において既に、動作主の意志によらない動きであるということになる。受身に関して、対象変化の程度という他動性の指標が、その成り立ちやすさに影響していたことに比べると、意志性の程度が自発文の成り立ちやすさに影響しているとまでは言い難い。

4.2 意志性を軸にした受身と自発の把握

意志性という他動性を軸にした、受身と自発の把握を試みる。

自発は、動作主の非意志的行為を表すものであるが、自発になり得る内的な動詞もまた非意志的である。では、受身となる動詞の意志性はどのような様相を見せるだろうか。

(29) 太郎が花子に殴られた。

(30) 太郎が花子ににらまれた。

(31) 大切な模型が親戚の子どもに壊された。

(32) 財布が落とされた。

(29) の「殴る」、(30) の「にらむ」は、共に意志性の高い動詞である。(31) の「壊す」は、動作主「親戚の子ども」が何等かの目的をもって意図的に「壊す」という行為に及んだのであれば意志性が高いといえる。しかし、「壊す」という行為には必ずしも意志性が伴うとはいえず、不注意で、意図せずになされることもある。(31) の受身文からは、「親戚の子ども」の意志性の有無までは判断できない。(32) の受身文は、「落とす」の意志性の有無によって解釈が限定される。(32) を自然な受身文として解釈するならば、かなり細かい状況の設定が必要である。例えば、言うことを聞かないと大切な財布を川に落とす、と脅したにもかかわらず相手が屈しなかった状況で、脅した者が財布を落とす。その現場を(32) のように描写することがあるかもしれない。その一方で、一般的に考えられる「(不注意で) 財布を落とした」という状況を、(32) のように受身文で表現することは考えにくい。受身文の成り立ちやすさとして、意志性が関与している可能性がある。

受身となる動詞の意志性と、受身文の成り立ちやすさとは関連がありそうだが、意志性の有無という他動性の指標だけで、受身と自発を捉えてしまうと問題が生じる。

自発の典型とされる内的な動詞だが、これらは無意志動詞であるという指摘がなされていることは既に述べた。これにより、意志性の高い動詞は受身として成り立ちやすく、意志性の無い動詞は自発として成り立ちやすい、と把握してしまうと、「(不注意で財布を) 落とした」のような非意志的動詞を正確に位置づけることができなくなる。非意志的でありながら、自発になり得ないことを説明する必要がある。また同様に、無意志動詞とされる「思う」が(33) のように受身文になり得ることも説明しなければならない。

(33) このままでは、私が間違っていると思われてしまう。

自発と受身を意志性という一つの指標で計り、他動性スケールに位置付けることは難しいのではないだろうか。

5. まとめと今後の展望

他動性の指標のうち、対象変化の程度と意志性という観点から、受身・自発の統一的な把握を試みた。それぞれを独立した指標として受身・自発を位置づけるには、いずれも適切でないといえる。

対象変化の程度を軸に、受身と自発を連続体として把握できる可能性について述べたが、対象変化の程度が小さい全ての動詞が自発文になるわけではない。従って、意志性等、他の指標が複合的に影響している可能性も検討すべきである。

(29) 太郎が花子に殴られた。(再掲)

(30) 太郎が花子ににらまれた。(再掲)

(31) 大切な模型が親戚の子どもに壊された。(再掲)

思考動詞による自発の位置付けのみならず、受身文にも他動性に幅があるといえる。(29)は、動詞「殴る」の〈対象〉「太郎」が、負傷する、痛みを感じる等の変化を被るので、(30)の「にらむ」と比較すると、対象変化の程度という観点において、他動性の高い動詞である。ところが、このような差のある二つの動詞は、意志性という観点においては同程度である。また、(31)の動詞「壊す」の〈対象〉「大切な模型」は、大きな変化を被ってはいないものの、「壊す」という動詞そのものの意志性が高いとまでいえない。自発・受身という連続体はもちろんのこと、受身文に限定したレベルでも有効な指標の検討が必要である。

また、自発は非意図的な行為の発生を表すとされるが、その場合の「意図性」と、動詞が本来備えている「意志性」との関係を規定しなければならない。

それぞれ独立した指標として扱うのではなく複合的に影響していると見るべきで、そのためには、各指標を整理し、相互の関係を分析する必要がある。また、先行研究で指摘されている指標以外にも、受身・自発の統一的な把握に有効なものがあるかもしれない。その検討も含めて、今後の課題としたい。

参考文献

- ウェスリー・M・ヤコブセン(1989)「他動性とプロトタイプ論」、久野暲、柴谷方良編『日本語学の新展開』くろしお出版 pp.213-48
- 影山太郎(1996)『動詞意味論』くろしお出版
- 金水敏(1991)「受動文の歴史についての一考察」『国語学』164集
- (1993)「受動文の固有・非固有性について」『近代語研究』第9集 pp.473-508

工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——』

ひつじ書房

柴谷方良(2000)「ヴォイス」仁田義雄・益岡隆志編『日本語の文法 1 文の骨格』岩波書

店

杉本和之(1997)「意志動詞と無意志動詞の研究—その 2」『愛媛大学教育学部紀要』 29-2

pp.33-47

角田太作(1991)『世界の言語と日本語』くろしお出版

——(2009)『世界の言語と日本語 改訂版』くろしお出版

村木新次郎(1991)『日本語動詞の諸相』ひつじ書房

林青樺(2009)『現代日本語におけるヴォイスの諸相 事象のあり方との関わりから』くろ

しお出版

Paul J. Hopper and Sandra A. Thompson (1980) “Transitivity in grammar and

discourse” Language 56

用例出典

『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』

附記 本章は、平成 22 年度博士課程（後期課程）認定論文の一部に、加筆・修正をしたものである。

第2章

ラレル文多義解釈の成立条件

——思考動詞主体〈経験者〉・格表示・話し手の相関——

1. はじめに

現代日本語においてラレル形式を伴う文¹は、〔自発〕²〔受身〕〔尊敬〕〔可能〕という4種の解釈が成立し得るものである。各解釈例を以下に挙げる。

- | | |
|--------------------------------------|------|
| (1) a. 私には高校時代が懐かしく <u>思い出</u> されます。 | 〔自発〕 |
| b. 太郎が花子に <u>殴</u> られた。 | 〔受身〕 |
| c. 社長が二次会に <u>参加</u> されるそう。 | 〔尊敬〕 |
| d. 私は納豆が <u>食</u> べられます。 | 〔可能〕 |

(1a)～(1d)のラレル文は、それぞれの解釈が確定し、2通り以上の解釈間で揺れが生じることはない。他方、(2)は4通りに解釈することができる。

- | | |
|--------------------------|---------------|
| (2) <u>見</u> られるかもしれません。 | 〔自発・受身・尊敬・可能〕 |
|--------------------------|---------------|

(2) だけでは、いずれの解釈が妥当かは曖昧である。ところが、(3a)～(3d)のように文脈や項を補うと、解釈の揺れは見られなくなる。

- | | |
|--|------|
| (3) a. 確かにこれらの事例にはそういった共通点が <u>見</u> られるかもしれません。 | 〔自発〕 |
| b. 妙な髪形をしているので、今日、私はジロジロ <u>見</u> られるかもしれません。 | 〔受身〕 |

¹ 動詞未然形＋レル・ラレルが述語となる文。以下、ラレル文。

² ラレル文の解釈は〔 〕で示す。

c. 今ならお時間があるようなので、先生が直接見られるかもしれません。

〔尊敬〕

d. この高台からなら、花火が美しく見られるかもしれません。 〔可能〕³

前後の文脈が与えられず、項が表示されていない(2)とは異なり、それぞれの解釈が確定している。従って、ラレル文の各解釈を決定付けているのは、ラレル文への参与者や、その人物が取る格・意味役割⁴などであると考えられる。

自発や受身といったそれぞれの意味用法をラレルという形式が持っていると考えより、同一形式である以上、各解釈に共通する何らかの意味・捉え方があると考えるのが自然である。従来のラレル文研究でも、各解釈の下位分類⁵が議論される一方で、ラレル文を統一的に把握するための格表示と意味役割の整理が行われている。ラレル文の共通点を探るべく行われている格表示・意味役割の整理をさらに進めるために、本章では、発話者が誰であるかという概念「話し手」を用いて分析を行いたい。

(4) 「太郎が犯人だと思われます」⁶

〔自発・受身〕

(4)もまた(2)同様、文脈や項の表示が不十分なため解釈が確定しない。(4)に、文脈・項だけでなくイベントに対して話し手がどのように参与しているかという情報も補ってみる。

以下、文中に表示される話し手には□、〈経験者〉⁷には■を付す。

(5) a. 花子「あなたとは意見が異なりますが、私には太郎が犯人だと思われます」

【話し手】=花子、〈経験者〉=花子】〔自発〕

³ 現代共通語において、動詞「見る」は「見える」「見れる」という形で可能を表すのが一般的だが、「見られる」であっても(3d)のラレル文は可能文として成立していると判断できる、〔可能〕とした。

⁴ ここでは益岡隆志(1987)の規定に従い、「抽象的レベルで捉えられる、項の述語に対する意味的關係の諸類型(p.101)」のうち、動作主、経験者、対象を用いる。

⁵ 現代語における受身に関しては、直接受身・間接受身・迷惑の受身など(川村大 2004)。可能に関しては、許容性の所在が行為者の能力にあるか、行為者の周囲の状況にあるかという違いから、能力可能・状況可能という分類(川村 2004)や、行為実現の確かさと時間的限定性の有無から、潜在可能と実現可能という分類(林青樺 2010)がなされている。

⁶ 何者かによる発話は「」で示す。

⁷ 「感覚・感情などの精神活動・状態を経験する存在(益岡 1987 p.106)」である。動作動詞の主語〈動作主〉にあたる。

- b. 花子「私たちがあまりに怯えた様子でいると、警察に太郎が犯人だと思われ
ます」

【話し手=花子、〈経験者〉=警察関係者】〔受身〕

話し手の「花子」が〈経験者〉となっている(5a)は自発、話し手ではない「警察」が〈経験者〉である(5b)は受身の解釈が成り立っている。イベントに対する話し手の参与の仕方
もまた、格表示や項の意味役割同様、解釈成立に影響している可能性がある。多義解釈が
成立するラレル文を中心に、話し手にも注目して、ラレル文の解釈成立条件を分析する。

2. 先行研究

まずは、格表示と意味役割を整理し、ラレル文の統一的な把握を行ったものを確認する。
多義性を有するラレル文に共通するのは「出来文」という事態の捉え方である、と主張し
ているのが尾上圭介(1998a 他)である。出来文は、「事態をあえて個体の運動(動作や変化)
として語らず、場における事態全体の出来、生起として語るという事態認識の仕方を表(尾
上 2003 p.36)」すものである。尾上(1998a 他)による出来文の場とは、ガ格表示される主
語、もしくは助詞ハによって取り上げられる第一主語を指す。事態が生起したことを述べ
る際に中心となるのは、どこでその事態が出来したかという「場」であるため主語となり
得る、と説明されている。

ラレル文全体を「出来」という共通の性質を持つものとして捉えつつ、「場」となる主語
の性質と解釈との相関も明らかにしている。尾上(1998a 他)による用例を(6a)～(6f)、
(7a)(7b)、(8)で一部表記を改めて引用しながら確認する。自発・可能は、「事態が生起した
こと」そのものを表す用法であるため、主語となるものの性質に制限はないという。主語
となるその「場」においてある事態が出来したと捉えることができれば、何であっても主
語になる。

(6) 事態生起を焦点化〔自発〕〔可能〕〔意図成就〕⁸

- a. 私は故郷が懐かしく思い出される。(尾上 2003 p.39)〔自発〕

〈感情の主者〉

b. コートを脱いだ人の姿がちらほら見られる。(尾上 1998b p.90)〔自発〕

〈知覚・認識・判断の対象〉

c. この浜辺はあのころのことがしのばれる。(尾上 1999 p.89)〔自発〕

〈場所〉

d. 私は納豆が食べられない。(尾上 2003 p.39)〔可能〕

〈能力持ち主〉

e. 甘納豆は誰でも食べられる。(尾上 2003 p.39)〔可能〕

〈可能動作の対象〉

f. この寮はいつでも電話が／をかけられる。(尾上 2003 p.39)〔可能〕

〈場所〉

受身は、動作主でないものに視点を置く表現であるから、動作主でないもの、すなわちラレル形式が付加されない動詞述語の動作対象が主語になるとされる。受身の下位分類である間接受身の主語は、何らかの影響を受けると認められるものである。

(7) 動作主でないものを焦点化〔受身〕

a. 太郎は母親に叱られた。(尾上 1998a p.80)〔受身(直接)〕

〈対象〉

b. 太郎は娘に家出をされて、弱っている。(尾上 1998a p.80)〔受身(間接)〕

〈被影響者〉

尊敬文は通常、主語がある動作を行うことを表してはいるのだが、その主語の動作主性を弱め、行為の直接性を消すことによって尊敬表現となっているものであるという。主語の動作主性を表さないために、あたかも主語を「場」として動作事態が出来したかのように表現する。それ故、「場」となるのは動作主に限られると述べられている。

(8) 動作主性消去〔尊敬〕

夏目先生が長編小説を書かれた。(尾上 1999 p.86)〔尊敬〕

〈動作主〉

⁸ 「動作主の期待に沿う事態実現(尾上 2003 p.38)」を指す。

このような、場となる主語と解釈との関係の指摘は、尾上(1998a 他)では現代語が中心となっているが、川村大(2005)では古代語を対象としており、ラレル文を出来文として把握する立場の、より一層の有効性を主張している。

しかし、これら主語の性質と解釈との相関に関しては、次のような疑問も認められる。自発の(6b)、受身の(7a)は、いずれも意味役割〈対象〉を「場」とした出来である。自発は事態生起を焦点化するために、受身は動作主ではないものを焦点化するために、それぞれ出来という把握が行われる。どちらも、それぞれの目的に沿って〈対象〉が「場」として述べられているが、出来文把握を用いる動機が異なっていながら、なぜ、同じ〈対象〉が「場」となるのだろうか。また逆に、「場」が同じ〈対象〉であっても自発・受身という異なる解釈が成立するのはなぜか。同じ〈対象〉という「場」に、何らかの性質の違いがあるのか。自発・受身文の主語とされる〈対象〉を「場」とする見方の妥当性は、検討の余地がある。

また、自発は一般に、「動作主が意図しない動作の発生」と考えられ、このことは、自発ラレル文が自然な出来事の出現を表す場合にも使われる「～テクル」との共起が可能であることから明らかである(森山卓郎 1988)。

(1) a'. 私には高校時代が懐かしく思い出されテキます。 [自発]

先に述べた疑問と関連するが、自発が動作主の非意図的な動作を表すものだとする、自発の「場」となるのは、(8)で見た尊敬同様に、〈感情の主者〉とも考えられる。動作主性を消すという性質を持つものこそ「場」となるのではないか。3.4 で詳述するが、自発文における一人称の〈経験者〉が文中に表示される割合は低い。〈経験者〉が表示されないため、(6b)(6c)のように〈経験者〉以外の項が主語となり、「場」とであると認定されることになる。尾上(1998 他)では、自発は事態が生じたことそのものを表すという性質により、どのような項であっても「場」として表現できると述べられているが、行為者による、動作主性の低い非意図的行為を表すために、〈経験者〉が「場」となる、という把握も可能であろう。格の現れ方が類似している〔自発〕と〔可能〕に共通する説明を試みるならば「事態生起の焦点化」と捉えることになるだろうが、〔自発〕と〔可能〕の間にある意図性の有無という違いを、「場」という概念を用いて説明することはできないだろうか。

さらに、自発(6a)では〈感情の主体〉、尊敬(8)では〈動作主〉が「場」であると認定される。いずれも動詞の主体である存在が、自発では一人称「私」、尊敬では三人称「夏目先生」であることに注目したい。自発文の〈経験者〉は一人称を取ることが多く、小説の地の文など特殊な場合を除くと、三人称は不自然である。一方、尊敬文の主語が一人称となることはない。話し手という視点を加えて「場」の性質と解釈との相関を捉えなおすことができるのではないか。

先行論で「話し手」に注目して分析を行ったものに、植田瑞子(1998)がある。「話し手」と明言してはいないが、特定の「私」という存在に言及している。

植田(1998)はまず自発の解釈が成立する動詞を、感情・心情を表す「感じる」「思い出す」などの A 型動詞、思考・判断を表す「考える」「判断する」などの B 型動詞に分類し、自発文には A 型動詞・B 型動詞の二系列が存在することを主張している。それぞれの系列の動詞にラレル形式が付加されて自発文となった場合、主体が誰であるかという点と、後接するテンス・アスペクトに違いが見られるという。A 型動詞では主体が特定の「私」「我々」となり、どのようなテンス・アスペクト形式をとっても自発にしか解釈されないと述べている。一方 B 型動詞では、主体が特定の「私」「我々」となる場合と、不特定多数の「多くの人々」「皆」となる場合がある。主体が特定であれば、テンス・アスペクトに関わらず自発となるが、不特定多数だと、テンス・アスペクトによって自発・可能・受身のいずれかに解釈されたり、多義性が生じたりするという。

以上、植田(1998)で行われた、主体とテンス・アスペクト形式からのラレル文多義解釈の分析は、主体が誰であるかという観点からの分析である点に注目できるが、問題点としては、「私」という人物の定義が曖昧であることが挙げられる。植田(1998)は、不特定多数の主体であると判断されるものには、特定の「私」が埋没していると述べる。

(9) 一日も早い景気の回復が待たれる。⁹ (植田 1998 p.112)

(9)は B 型動詞で主体が不特定多数であると判断されている例である。ところが、次の(10)では、話し手が特定の「私」とあるという。アナウンサーの実況放送である。

(10) (私には)壊れたビルの修復はとても難しいように思われます。¹⁰

(植田 1998 p.113、一部表記改)

仮に(9)を(10)のようにアナウンサーの実況と見なした場合、主体が特定の「私」となるのだろうか。主体が特定か不特定多数かという認定の曖昧さは、植田(1998)によって挙げられる例文が、前後の文脈が全く与えられない作例であったり、採集した用例であっても、発話や小説の地の文などが分類されずに扱われたりすることによって生じたものと考えられる。この点の判断が統一されない限り、結論の妥当性は十分とはいえないだろう。植田(1998)は話し手の参与のあり方を解釈決定要因の一つと考えている点で論者と立場を同じくするが、特定の主体「私」という概念をより明確なものにした上で分析を行う必要がある。

3. ラレル文の動詞主体・話し手・格表示に注目した分析

ここからは、ラレル文の動詞主体が誰であるのか、話し手はどのようにイベントに参加しているのか、また、それぞれが文中に表示される際にどのような格をとるか、という 3 点に関して分析を行う。話し手となる人物を特定し、主体認定の曖昧さを回避するため、小説¹¹において「」で括られた会話文中に存在するラレル文を対象とする。文脈から、話し手及び主体を特定することが可能となる。なお、ラレル形式が付加される動詞は、思考動詞「感じる」「思う」「考える」に限定する。現代語において自発が出現するのは、ほぼこれら一部の思考動詞ラレル文である。特定の解釈が成立する際の話し手・主体の関係を整理するためには、自発の解釈も成立する思考動詞ラレル文でなければならない。

3.1 〈経験者〉となる人物と格表示

まずは、自発・受身・尊敬・可能それぞれの解釈が成立するラレル文の主体となる人物を確認する。主体とは、分析の対象が思考動詞ラレル文であるため、意味役割は〈経験者〉

⁹ 植田(1998)による作例。

¹⁰ 植田(1998)により、NHK 放送(95.2.2,朝)から引用されたもの。

¹¹ テキストは『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』を使用。ただし、翻訳作品は除く。

となる。

収集データを分析すると、自発解釈ラレル文の動詞の主体である〈経験者〉は、主に話し手であることが分かる。

- (11) 「私には二つのものが全く性質を異にしているように思われます」(こころ)

【〈経験者〉＝私、話し手＝私】〔自発〕

- (12) 「……あなたはいつか自然なんぞが本当に美しいと思えるのは死んでいこうとする者の眼にだけだと仰しかったことがあるでしょう。……私、あのときね、それを思い出したの。何んだかあのときの美しさがそんな風に思われて」
(風立ちぬ)

【〈経験者〉＝節子、話し手＝節子】〔自発〕

ラレル文の中に話し手・〈経験者〉が出現しているかどうかという違いはあるが、(11)(12)どちらも、〈経験者〉という主体は話し手である。本稿の調査範囲中、自発の解釈が成立する場合の 9 割近くの用例において〈経験者〉は話し手となっていた。〈経験者〉は、助詞ハ・モの後接した二格か、ハ・モなどによって表示される。

受身の〈経験者〉は、自発とは逆に、話し手である場合が少ない。

- (13) 「(略)いっそ、こっちが家を飛び出しちまおうかと……ひとには道楽者みたいに思われて、あたしほど不仕合せな人間はありません」(葦手)

【〈経験者〉＝ひと、話し手＝仙吉】〔受身〕

- (14) 「相手が喧嘩を売ってきたのとちがうから、おい、黒、おめえ、まずいことをしたなあ。宇野が少年院のなかから指図をしたように考えられたら、佐倉の言ったように、宇野が困るよ」(冬)

【〈経験者〉＝警察関係者、話し手＝安】〔受身〕

〈経験者〉は、(13)のように文中に表示されることも、(14)のように表示されないこともあるが、受身文の大多数において、〈経験者〉は話し手以外の人物である。受身文 41 例中 4 例は、〈経験者〉が話し手となっているが、いずれも従属節内に限られるという特徴が見られる。(15)では、条件節にラレル文が現れている。

- (15)「それならなぜ黙って故郷へ帰ったのだ。日頃が日頃だから、そう考えられてもしょうがないだろう」(孤高)

【話し手＝影村、〈経験者〉＝影村】〔受身〕

格表示に関しては、〈経験者〉が助詞ハ・モを伴う用例もあるが、自発の場合とは異なり、二格単独で表示されることもある。

(16)に示す尊敬もまた、話し手が〈経験者〉とはならない。受身の場合とは異なり、全用例において〈経験者〉は話し手ではない人物である。

- (16)「あなたが、不意うちだと感じられたのも、無理ないと思います。あんなところにいながら、あの子、どうしてそんなことが出来るのでしょうか」(冬)

【〈経験者〉＝理一(あなた)、話し手＝澄江】〔尊敬〕

尊敬では、〈経験者〉はガ格表示される。

そして最後に可能は、自発同様〈経験者〉が話し手であることが多い。〈経験者〉は、自発と同様にハ・ニハで表示されるといえる。受身のような、二格単独での表示は見られない。

- (17)「(略)あたし、ほんとうはね、大概な問題はちゃんと考えられたんだけど、わざと譲治さんを困らせてやろうと思って、出来ないふりをしてやったの、それが譲治さんには分からなかった？」(痴人)

【〈経験者〉＝ナオミ(あたし)、話し手＝ナオミ(あたし)】〔可能〕

- (18)「あの時計は誰のためだろう。この部屋に運びこまれる死体のためだとしか考えられないな」(死者)

【〈経験者〉＝僕、話し手＝僕】〔可能〕

自発と可能において、話し手が〈経験者〉ではない人物となっているものも存在する。

- (19) 「(略) ビザンチンの人々にすれば、宗教と政治の完全な一体化を当然の前提条件としない政治理念など、考えられもしないことなのだから」 (コンス)

【話し手＝師、〈経験者〉＝ビザンチンの人々】〔自発〕〔可能〕

しかし〈経験者〉が話し手ではない自発・可能文 29 例中 19 例において、ラレル文が疑問文となっており、〈経験者〉はその疑問文の聞き手であるという特徴がある。

- (20) 「だがな、パードレ。日本と申す男は、わざわざ、異国の女性を選ばずとも、同じ国に生れ、気心知れた日本の女と結ぶのが最上と思われぬか」 (沈黙)

【〈経験者〉＝パードレ(聞き手)、話し手＝筑後守】〔自発〕¹²

- (21) 「あなたが書いたその論文を、何かの拍子に頼央さんが読む、ということは考えられることですかい」 (エディ)

【〈経験者〉＝七瀬(聞き手)、話し手＝木下】〔自発・可能〕

ラレル文の〈経験者〉と格は、傾向として以下のようにまとめられる。

- (22) 自発：〈経験者〉ニ格＝話し手(164 例中 140 例)¹³

受身：〈経験者〉ニ格≠話し手(41 例中 37 例)

尊敬：〈経験者〉ガ格≠話し手(35 例全例)

可能：〈経験者〉ニ格＝話し手(54 例中 49 例)

〈経験者〉が話し手であるか否かは、ラレル文の人称に関わる従来の研究とも矛盾しない。自発に関しては森山(1988)で、語りの視点を異動させない限り一人称主語になる、という指摘が見られる。受身については、受身文の主語となるのは話し手自身か話し手に近い人物であることが好ましい、と久野暲(1978)によって述べられている。話し手が主語となるのが最も自然であるならば、〈経験者〉は話し手以外の人物ということになる。尊敬は、

¹² 「尊敬」の解釈も成り立つが、多義に解釈される中間例については 3.3 で述べる。

¹³ 〈経験者〉と話し手の一致・不一致に関する用例数である。〈経験者〉の格は、表示されている用例から、あくまで傾向として述べるに止まる。

話し手本人が尊敬文の主語にはならないという川村(2004)による言及と合致する。自発・受身の格表示については森山(1988)で、どちらも能動文における〈経験者〉ガ格を二格¹⁴で、〈対象〉ヲ格をガ格で取り上げることが指摘されている。従来の研究ではこれらラレル文各用法の格表示、動詞の主体の意味役割と、話し手の参与の様相は、現象の記述に止まっていた。しかしその相関は、ここまでの整理により明らかである。本稿ではこの相関を重視し、解釈決定の条件と考える。

3.2 話し手の参与の仕方

本稿では調査対象を小説の会話文に限定しており、ラレル文の話し手が誰であるか特定することができる。ここでは、各解釈において、特定される話し手がどのような立場でイベントに参加しているか整理してここまでの見方を検証する。

3.1 で確認した通り、自発・可能文の話し手は〈経験者〉となる場合がほとんどである。

日本語の受身文には、金水敏(1993)で、受影性を表す固有の受身文と、受影性を表さない非固有の受身文が存在するという仮説¹⁵が提示されている。対象とした受身文は、固有の受身文であると判断することができるものであった。

- (23)「内臓は悪くない筈だから、只、僕、今日、こんなカサブタだらけの顔してるだろう。だから、あんまり知らない店に行くのいやなんだ。変な病気だと思われて、追っ払われると困るからね。(略)」(太郎)
- 【話し手＝藤原、〈経験者〉＝店員】〔受身〕

(23)の話し手「藤原(僕)」の顔にはカサブタがあるため、それを見た馴染みのない店員が、「あの客(藤原)が変な病気だ」と思ったり、そのような思考を行った店員が「藤原」を追っ払ったりする可能性がある。(23)における「思われ」という動詞述語が表すイベント

¹⁴ ただし、自発文の場合は助詞ハを伴うことが多いが、受身ではそのような傾向は見られないとする。「自発の場合、「ハ」によって、全体的な主語は交替しないということが言えそう(森山1988 p.128)」だと考えられている。

¹⁵ 固有の受身文は「太郎が花子に殴られた」のように、「太郎」が「花子が(太郎を)殴る」という動作によって影響を受けていることを表し、動作主は二格である。一方非固有の受身文は「新しいビルが、山田建築によって一週間前に建設された」というタイプのもので、受影性を表さず、動作主はニヨッテで表示される。

によって、「藤原」が影響を受けることになる。思考動詞による受身文の話し手は、イベントの影響を受ける存在¹⁶となる。

話し手は、尊敬文においてはラレル文で表されるイベントに参加しない。

(24) 「すぐ、そこじゃ。お案じになる程遠うはない」／「すると、栗田口辺でござるかな」／「まず、そう思われたがよろしかろう」 (芋粥)

【話し手＝利仁、〈経験者〉＝五位】〔尊敬〕

(25) 「よろしく願いいたします。私は政府が今回、アルカロイド製法の指定会社をふやし、この分野をもりたてようと考えられたことは、非常にけっこうだと思っております……」 (人民)

【話し手＝星、〈経験者〉＝政府】〔受身〕

(22)にまとめたように、受身・尊敬の〈経験者〉は、話し手以外の人物であることが多い。〈経験者〉項は、受身の場合は二格、尊敬の場合はガ格表示されるという違いがある。全てのラレル文において格が表示されているわけではないが、イベントに対する話し手の参与の仕方が対照的であるため、受身と尊敬の間で解釈が揺れることは、それ程多くない。思考動詞文の引用節で表示される思考内容に対して、固有の受身の場合は話し手が関与し、受影性を表している。尊敬文では、話し手が思考内容に対して、直接あるいは間接的に関与し、影響を受けているとは考えにくい。受影性の有無により、たとえ〈経験者〉項が表示されていなくても、ラレル文の解釈が受身・尊敬と区別されることが考えられる。

ラレル文話し手の参与の仕方は以下の通りである。

(26) 自発：話し手＝〈経験者〉二格(164 例中 140 例)

受身(固有)：話し手＝イベントの影響を受ける(41 例中 37 例¹⁷)

尊敬：話し手としてのみ存在(35 例全例)

可能：話し手＝〈経験者〉二格(54 例中 49 例)

¹⁶ 固有の受身文であれば、直接影響を受けている人物が話し手本人ではなくとも、話し手が共感を寄せやすい人物であれば、受身文として表現することもできる。そのようなタイプの受身文も、話し手がイベントの影響を受けていると判断した。

¹⁷ 41 例中 4 例は、〈経験者〉が話し手となっており、話し手が影響を受ける存在にはならない。しかしこの 4 例においては、話し手以外の人物が、話し手の思考内容から何らかの影響を受け

3.3 多義解釈が成立するラレル文

〈経験者〉・話し手の性質が、実際にラレル文の解釈成立に影響している用例を挙げ、多義解釈の成立条件を分析する上で(22)(26)の整理が有効であることを確認する。

(27) 「出来心と思われるかもしれませんが……そうではないのですよ。年ごろ、ずっと、あなたを思っていたのです。得がたい折と思うともう、辛抱しきれないで。(略)」
(新源氏)

【話し手＝光源氏、〈経験者〉＝空蟬】

(27)は、光源氏による発話だが、〈経験者〉となる人物の認定と、イベントに対する話し手の参与の仕方によって、自発・受身・尊敬¹⁸の三通りに解釈することができる。まず、〈経験者〉となる人物が話し手ではない「空蟬」なので、(22)より、受身か尊敬の解釈が自然に成立する可能性が高そうである。受身の場合には(26)で述べたように、イベントから何らかの影響を受ける、という話し手の関与の仕方が特徴として見られた。(27)は、「空蟬が、光源氏の行為を出来心からのものだと思う」という内容が受身で表現されているものなので、自らの行為を「出来心だ」と評価される話し手の「光源氏」は、イベントから影響を受ける存在であると判断できる。このような読みが可能のため、(27)は受身文として成立する。また、話し手「光源氏」が〈経験者〉の「空蟬」を上位に待遇しようとするのは十分に考えられることであり、尊敬文としても解釈できる。その際は、受影性を積極的に表さない客観的な描写であると考えられる。自発は、(22)で〈経験者〉が話し手となる場合が非常に多いことを確認した。〈経験者〉が話し手ではない人物となる(27)が自発として成り立っているのは、カモシレナイというモダリティ形式の付加によるものだと考えられる。

(28)a. 花子「?警察は、太郎が犯人だと思いました」

b. 花子「私は、太郎が犯人だと思いました」

ている。受影性という観点からは固有の受身文であると判断できる。

¹⁸ 可能に解釈されにくいのは、「思われる」より「思える」という可能動詞を用いて表現する方が一般的であるからだと考えられる。

c. 花子「警察は、太郎が犯人だと思ったかもしれません」

動詞「思う」が三人称主語をとる(28a)は不自然だが、カモシレナイが後接した(28c)は問題なく成立する。モダリティの付加によって、〈経験者〉が話し手ではなくても自発に解釈されるのだろう。なお、自発の解釈が許容されるラレル文のうち、〈経験者〉が話し手ではないものの多くは、3.1 で述べたように疑問文であるか、カモシレナイ、ダロウなどモダリティの付加や、名詞節・条件節内への出現、話し手による第三者の自発表現の引用¹⁹といった特徴が見られる。こういった特徴により、〈経験者〉が話し手でなくとも自然な自発文として成立するのだろう。

次の用例は、文脈を踏まえて〈経験者〉を認定した場合は自発・可能にしか解釈できないものだが、ラレル文を独立したものとして見た場合、文中に出現する二格によって、受身にも解釈できるものである。

(29)「もしそういうときの冬子に、何か病的なもの、不安なもの、ぶきみなものが感じられたとしたら、ぼくにしても決してぼんやりしちゃいられなかったでしょう。

(略)」(マルス)

【話し手＝三治、〈経験者〉＝三治】〔自発・可能〕

【話し手＝三治、〈経験者〉＝冬子】〔受身〕²⁰

話し手の「三治」が〈経験者〉となり、(22)の傾向に当てはまる。ところが、ラレル文中に出現している二格「冬子」を〈経験者〉とした受身の解釈も成立する。〈経験者〉が話し手ではない人物であり、「冬子が、(三治に)病的なもの、不安なもの、ぶきみなものを感じる」というイベントによって、話し手「三治」はマイナス評価を受けるという影響を被ると判断できるからである。なお、受身に解釈した場合、〈経験者〉が二格表示されているた

¹⁹ 以下が引用の例である。〈経験者〉は話し手「娘」ではなく、「母」である。

「姫君は、人なみの方ではないので、もし、あなたのお心が変わったら、うらめしく思われるだろう、ということを、母は毫碌しておりますので、へんな風に詠んだのですわ」
(新源氏)

【話し手＝娘たち、〈経験者〉＝母】

²⁰ 迷惑受身は、次のように〈対象〉がヲ格で表示されることが多い。

・太郎はスリに、お金{?}が／を盗まれた。

(29)の受身解釈が許容されるように感じられるのは、「何か病的なもの、不安なもの、ぶきみなもの」という〈対象〉の、複数の語が列挙されるという性質が影響している可能性がある。

め尊敬には解釈できない。〈経験者〉が取る格もまた、話し手の参与の仕方同様に、重要な解釈決定要因であることが裏付けられる。

3.4 原則から外れたラレル文における第一主語としての話し手表示率

3.1 では、〈経験者〉となる人物が解釈成立の条件となっている可能性について述べた。ここでは、(22)でまとめた条件を侵していながら各解釈が成立しているラレル文に共通する特徴を見ていく。

自発の解釈が成り立つラレル文のほとんどでは、〈経験者〉が話し手である。そうでない場合は、モダリティ付加など何らかの特徴を有している。他にも、自発において〈経験者〉が話し手ではない人物である場合、その人物がラレル文中に表示されるという傾向が見られる。対象となる用例を再掲する。

- (19) 「(略) **ビザンチンの人々**にすれば、宗教と政治の完全な一体化を当然の前提条件としない政治理念など、考えられもしないことなのだから」 (コンス)
- 【話し手=師、〈経験者〉=ビザンチンの人々】〔自発〕〔可能〕

自発文として成立し得る 164 例のうち、〈経験者〉が文中に表示されていたものは、〈経験者〉が話し手である 140 例中では 12 例、〈経験者〉が話し手ではない人物である 24 例中では 7 例見られた。

〈経験者〉		〈経験者〉 項の表示	
話し手	140	有	12(8.6%)
		無	128(91.4%)
話し手以外	24	有	7(29.2%)
		無	17 ²¹ (70.8%)

表 自発文における〈経験者〉表示の有無

²¹ 話し手ではない人物が〈経験者〉であっても、17 例(70.8%)において〈経験者〉項は表示されていない。ところが 17 例中 11 例は疑問文であり、聞き手が〈経験者〉であることが明らかなものである。そのような場合においても、〈経験者〉である話し手の表示率が低いのと同様に、

〈経験者〉が話し手だと、話し手ではない人物である場合と比べて、ラレル文中に〈経験者〉が出現する割合は低くなっている。自発文の〈経験者〉は原則的に話し手であり、その傾向から外れた場合に〈経験者〉が表示される傾向があるといえる。

文中に表示されることが少ない自発文の話し手は、思考動詞の主体で、自発ラレル文の第一主語であると考えられる〈経験者〉項である。一方、直接受身文は、動詞述語の動作対象が主語であるといえる。思考動詞は引用節を取ることが多く、〈対象〉が受身文の主語であるとはいいがたい。そのため自発の場合のように、受身文では第一主語である〈対象〉が話し手となる、という原則を立て、その原則に従っている受身文・従っていない受身文において、それぞれ話し手の表示率を確認することは困難である。だが、本稿で扱う範囲からは外れるが、〈対象〉をとる動作動詞の受身文では、話し手が〈対象〉となる場合、(30a)よりも、話し手を表示しない(30b)の方が自然な受身文であると感じられる。自発同様に、話し手が第一主語となる場合は、表示しない傾向が見られると予測できるかもしれない。

(30)a. 母親「太郎、どうしたの」

太郎「僕{が／は}花子に殴られた」

b. 母親「太郎、どうしたの」

太郎「花子に殴られた」

特に思考動詞自発文において、(22)〈経験者〉が話し手かそれ以外の人物か、という点は、ラレル文の解釈成立に影響している。この条件を侵す自発文は、〈経験者〉項が表示されるという傾向が確認された。

4. まとめ

ラレル文の話し手という観点に注目し、それぞれの解釈が成立する際の条件として、(22)〈経験者〉が誰であるか、また、どのような格を取るか、(26)話し手がイベントに対してどのように参与しているか、という点を整理した。(22)(26)の条件の妥当性は、多義解釈が成立する用例及び、条件を侵していながら成立するラレル文における〈経験者〉表示の

〈経験者〉を表示することが少ないと考えられる。

有無を確認したことによって高められたものと思われる。さらにこれらの分析は、ラレル文の人称に関わる従来の研究とも矛盾しない。

尾上(1998 他)で、自発の「場」がさまざまに設定されるのも、自発の〈経験者〉が表示されることが少ないからという可能性がある。自発文の〈経験者〉は(6a)のように助詞へで取り上げられることが多く、第一主語だといえる。ところが、話し手が〈経験者〉となった場合、思考動詞の引用節では格が表示される一方、〈経験者〉はあまり出現しない。会話文を対象とした場合、〈経験者〉の多くは話し手であるため文中に表示されず、その結果〈経験者〉以外の項が主語となり、「場」であると認定されることになる。先行論では、自発は事態が生起したことそのものを表すため、どのような項であっても「場」として表現できるとされていたが、行為者の非意図的行為を表すため、〈経験者〉が「場」となる、という把握も可能であろう。ラレル文に出現しない主語を「場」と認定することは問題かもしれない。しかし、話し手の非表示は、文脈上明確であることに起因するものであり、〈経験者〉項と話し手との結びつきは、自発文においては強固なものであることはこれまでに見てきた通りである。表示されていないとも、出来の「場」として〈経験者〉の意図性を消して表現するラレル文が自発である、と考えたい。可能に対する説明は課題として残されるが、自発同様に古くからあるとされる不可能の解釈に関しては、実現しないことが行為者の意図によるものではないと把握すれば、自発と共通の事態認識を行っているといえよう。不可能は、「場」である〈経験者〉あるいは〈動作主〉の意志によって「しない」のではなく、非意図的に「できない」と考えることができる。「できない」という非意図的事態が、「場」において出来していると捉えられるのではないだろうか。

動作動詞の主体が〈動作主〉であるのに対し、思考動詞の主体は〈経験者〉である。現代日本語では、他の多くの動作動詞と比べて動作主性の低い思考動詞だからこそ、非意図的行為を表す自発の解釈が成立しやすいと考えられる。また、同じ思考動詞であっても、自発においては〈経験者〉が話し手にほぼ限られるが、受身では話し手以外の人物である。この人称の違いが思考動詞の機能の違いと相関しており、それぞれの解釈の本質に関与している可能性がある。

自発・受身・尊敬に関しては、〈経験者〉及び、話し手のイベントに対する参与の仕方が条件となっているといえる。しかし、自発と可能の解釈の違いは、本稿の分析で明らかにすることはできなかった。今後は動詞の性質や可能の下位分類にも注目しながら、それぞれの解釈の成立条件を探り、統一的な把握を目指したい。

引用文献

- 植田瑞子（1998）「「自発」表現の一考察——自発文の二系列——」『日本語教育』96号、pp.109-20
- 尾上圭介（1998a）「文法を考える 5 出来文（1）」『日本語学』17巻1号、pp.76-83
——（1998b）「文法を考える 6 出来文（2）」『日本語学』17巻10号、pp.90-7
——（1999）「文法を考える 7 出来文（3）」『日本語学』18巻1号、pp.86-93
——（2003）「ラレル文の多義性と主語」『言語』32巻4号、pp.34-41
- 川村大（2004）「受身・自発・可能・尊敬——動詞ラレル形の世界——」尾上圭介編『朝倉日本語講座 6』朝倉書店、pp.105-27
——（2005）「ラレル形述語文をめぐって——古代語の観点から——」『日本語文法』5巻2号、pp.39-56
- 金水敏（1993）「受動文の固有・非固有性について」近代語学会編『近代語研究』9集、武蔵野書院、pp.475-508
- 久野暉（1978）『談話の文法』大修館書店
- 益岡隆志（1987）『命題の文法——日本語文法序説——』くろしお出版
- 森山卓郎（1988）『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 林青樺（2010）「潜在可能文と実現可能文との異同について——行為実現の確かさと限定性の観点から——」『日本語学会 2010 年度春季大会予稿集』pp.89-96

用例出典

『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』

略称 （冬）『冬の旅』、（孤高）『孤高の人』、（痴人）『痴人の愛』、（死者）『使者の奢り』、（コンス）『コンスタンティノーブルの陥落』、（エディ）『エディプスの恋人』、（太郎）『太郎物語』（人民）『人民は弱し、官吏は強し』、（新源氏）『新源氏物語』、（マルス）『マルスの歌』

第3章

自発・受身の成立条件

——思考動詞ラレル文形のテンス的意味に注目して——

1. はじめに

現代日本語のラレル文¹⁾は一般に、自発・受身・尊敬・可能を表す。同一形式で様々な意味を表すことになるが、多義解釈が同時に成立することは稀である。従って、各用法の成立にはそれぞれに条件があると考えられる。

自発用法は、「私には次郎が犯人だと思われる」のように思考動詞をはじめとする内的な動詞に典型的なものであるといわれている（森山卓郎・渋谷勝己 1988、森山卓郎 1988、植田瑞子 1998）。ところが、同じ思考動詞ラレル文であっても、「このままでは次郎が警察に犯人だと思われる」という受身用法も存在する。これらの用法は、何によって決定づけられているのだろうか。本章は、思考動詞ラレル文の自発・受身に限定し、各用法が成立する際の条件を探るものである。

思考動詞は、他の多くの動作動詞にはない、発話時現在の態度表明という働きをすることがある。まずはこのような、思考動詞において特殊な振る舞いを生み出す条件を確認する。その上で、自発・受身文のテンス・アスペクトの様相を観察し、態度表明文となる条件を満たしている場合に自発解釈が成立することを述べる。また、自発・受身用法に後接するアスペクト形式およびアスペクト的意味に見られる違いや、ラレル形式の後接による自発あるいは受身という解釈が、成立条件と連動して生じていることにも言及する。

2. 思考動詞による態度表明

「思う」「考える」など、現代日本語における思考動詞は、テイル形の後接が可能な、動作を表す動詞であるといえる。これは(1)(2)から明らかであり、(3)の状態動詞には一般にテイル形を付加できないことと対照的である(金田一春彦 1950)。

- (1) a. 太郎がグラウンドを走る。
- b. 太郎がグラウンドを走っている。
- (2) a. 私は〇〇が犯人だと思う。
- b. 私は〇〇が犯人だと思っている。
- (3) a. 広場に子供がたくさんいる。
- b. *広場に子供がたくさんいている。

動作動詞と状態動詞には、ル形で発話時現在を指すか未来を指すか、という違いが存在することも指摘されている(金田一 1950, 鈴木重幸 1957, 寺村秀夫 1984)。これは、仁田義雄(2002)における時の状況成分²との共起関係で確認できる。「今のところ」が発話時点を表し、「今に」「このあと」は発話時以後を表すものである。

- (1') a. {*今のところ／今に／このあと} 太郎がグラウンドを走る。
- (3') b. {今のところ／*今に／*このあと} 広場に子供がたくさんいる。

動作動詞の(1')では、発話時以後を指す「今に」「このあと」、状態動詞の(3')では発話時点そのものを指す「今のところ」との共起が可能であり、それぞれル形が表すテンスの意味が異なっていることが分かる。

ところが、動作動詞であると考えられる思考動詞は、特定の人物の発話として想定した場合、発話者や主体の人称によって共起可能な時の状況成分に違いが見られる。

- (2') a. 花子「{今のところ／??今に／??このあと} 私は〇〇が犯人だと思う」
- (4) 花子「{*今のところ／今に／??このあと} 太郎は〇〇が犯人だと思う」

発話者である花子が思考動詞の主体となっている(2')は、発話時点を表す「今のところ」との共起が可能で、動作動詞である(1'a)とは異なる振る舞いを見せる。その一方で、発話者

¹ 文末に(ラ) レル形式が付加されたものを指す。

² 「事態の外的な時間的位置づけ、言い換えれば、時間軸上における事態の出現・存在を指し示す(仁田 2002 p.202)」とされるもの。

である花子ではなく、三人称主体の(4)では、動作動詞の(1'a)同様、ル形で現在を表すことができず、未来を指すといえる。

先行研究において、思考動詞はどのように扱われているだろうか。鈴木(1957)において、思考動詞は動作的な意味がないわけではなく、テイル形が後接するという点で動作性動詞と共通している一方、ル形で現在を表すことができるという状態性述語の特徴も見られることから、動作状態性述語に分類されている。寺村(1984)もまた、思考動詞を動的述語に属するものと捉えながらも、ル形が現在を指すことがあると指摘する。ただ、鈴木(1957)、寺村(1984)共に、思考動詞のル形が発話時現在を指すのは、話し手の心理内容・心的状態を述べる場合であるという特徴も挙げている。

(5) a. 「私は、〇〇さんが犯人だと思います」

b. 「警察は、〇〇さんが犯人だと{*思います／思っています}」

(5a)と異なり、(5b)のように思考主体が話し手でなくなると、発話時現在の思考内容をル形で表すことができなくなる。テイル形の付加で発話時現在を指すのであれば、思考主体が話し手に限定されることはない。

(6) 「{私／警察}は、〇〇さんが犯人だと思っています」

(6) ではテイル形が後接して発話時現在を指す。この場合、思考主体として話し手の一人称「私」の他、三人称の「警察」も許容されることが分かる。

思考動詞のル形が指すテンス的意味や人称については、工藤真由美(1995)が詳しく述べている。工藤(1995)は、動詞の時間的展開の有無によるアスペクト対立という観点から、まずは外的運動動詞と静態動詞とに分類した。その上で、外的運動動詞と同様に時間的展開が認められるが、直接体験できるのが話し手だけであることから、スル(シタ)・シテイル(シテイタ)というアスペクト対立が時間的展開性だけでなく人称とも絡み合っている動詞、内的情態動詞という区分を立てた。思考動詞はこれに属するものとされる。

工藤(1995)によると、内的情態動詞のシテイル(シテイタ)は、はなしあいのテキストにおいて、テンス形式や人称に関係なく外的運動動詞と同様に継続性を表すが、スル(シタ)

は基本的に一人称に限られる³ことが多く、スルの場合は現在の思考や感情の表明・表出を表すという。

(7)態度表明

太郎「僕は、花子が世界一かわいいと思うよ」

ただ、一人称主体であっても、直接体験性の有無が問題にならない未来、すなわち思考の予測を表わすことがある。はなしあいのテキストにおいて思考の予測を表わす場合、二、三人称をとることもできる。つまり、未来を指す文脈では人称が限定されない。次の(8)は三人称主体のものである。

(8)思考の予測

次郎「(着飾った花子を見て)かわいいよ。太郎も絶対、花子が世界一かわいいと思うよ」

ここまでの工藤(1995)の記述より、表明文には、一人称主体をとり、かつル形で発話時現在を指すという条件があるといえる。(8)のようにル形で未来を表すのは思考動詞に限ったことではなく、(1)のような動作動詞において一般的な現象である。ただ、思考動詞をはじめとする内的情態動詞は、一人称主体をとり、ル形で現在を指すという条件下では、(7)のように発話時の態度表明や、感情・感覚の表出を表す⁴ことになる。

なお工藤(1995)において、シテイル(シテイタ)は思考の継続を対象化して捉え、確認・記述していると見ることができると述べられている。

³ テンス形式と人称制限については、テキストの種類との関連においても述べられている。はなしあいのテキストと区別されるかたりのテキスト及び解説のテキストにおいては、ル形と二、三人称との共起が可能であるという(工藤 1995)。金水敏(1989)でも、小説や物語の地の文「語り」の文体において、人称制限が観察されないとする。

⁴ 思考動詞のタ形では、表明・表出性そのものではなく確認・記述性がでてくるが、一人称に限定されるという(工藤 1995)。一人称主体を取るという条件も重要だが、テンス的意味に関しては、工藤(1995)の記述より、発話時の表明・表出性を表していることが明らかなル形で現在を指すという点を表明・表出の条件として重視し、分析を行う。

(9)継続の確認・記述

太郎「次郎も、花子が世界一かわいいと{思っている／思っていた}よ」

3. 自発・受身解釈の成立条件

以上のような思考動詞の性質を踏まえ、思考動詞ラレル文における自発・受身それぞれの解釈を観察し、条件を分析する。

3.1 対象とするラレル文

現代日本語のラレル文には、自発、受身、尊敬、可能、4通りの用法が存在する。

- | | |
|---------------------------------------|------|
| (10) a. 私にはあの夏の日が懐かしく <u>思い出される</u> 。 | 〔自発〕 |
| b. 太郎が花子に <u>殴られた</u> 。 | 〔受身〕 |
| c. 社長が二次会に <u>参加される</u> そうだ。 | 〔尊敬〕 |
| d. 私は納豆が <u>食べられる</u> 。 | 〔可能〕 |

このうち、(10a)の自発と(10b)の受身は、格交替の様相が共通している。ラレル形式をとらない文の、〈動作主〉あるいは〈経験者〉(= 部) ガ格、〈対象〉(= 部) ヲ格が、ラレル文ではそれぞれ〈動作主〉あるいは〈経験者〉ニ格、〈対象〉ガ格となる。

- | |
|--|
| (10) a. 私ニハ ガ懐かしく思い出される。 |
| a'. 私ガ ヲ懐かしく思い出す。 |
| (10) b. ガ花子ニ殴られた。 |
| b'. 花子ガ ヲ殴った |

この格の取り方は、自発ではニ - ガ、受身ではガ - ニになるよう語順が異なる上、自発の〈経験者〉は、(10a)のようにニハによる表示の方が自然に感じられ、ハのみで表されることも多い。また、ラレル文受身用法では主語が〈動作主〉あるいは〈経験者〉から〈対象〉へと交替しているが、自発用法では、ニ格で表示される〈経験者〉に主語の特性が認めら

れることが指摘されている(森山 1988)。

(11) *私には、先生のことが懐かしく思い出されなさる。

(12) 先生が花子に殴られなさる。

(11)の自発では、尊敬表現「なさる」が、ガ格「先生」でなくニ格「私」に対して用いられる解釈しか成立せず、不自然な表現である。尊敬先となる主語はニ格の「私」であり、その「私」に対する尊敬表現の使用が不適切であることが原因であるといえる。一方(12)の受身における「なさる」の使用は適切である。ニ格「花子」でなくガ格「先生」が尊敬先となっており、主語が「先生」であることが確認できる。このように、自発と受身では、主語がニ格かガ格かという違いが見られる。これらの主語の違いという現象にも何らかの説明がなされるべきであるが、本稿においては、自発、受身共に〈動作主〉〈経験者〉ガ格がニ格で、〈対象〉ヲ格がガ格で表示されるという共通点に注目したい。

尊敬は、受身から派生したもの、自発から派生したものなど諸説ある。いずれの説をとるにせよ、尊敬と自発・受身は格の現れ方が大きく異なっており、解釈の多義が生じにくいことから、本稿の対象とはしない。可能も自発と同様に、〈対象〉をガ格で、〈動作主〉〈経験者〉をニ格や、ニ格にハが後接した形、あるいはハのみで表す。しかし現代語では、思考動詞ラレル文が肯定文の場合、自発・可能の間で解釈が揺れることがあるが、否定文であれば、ほぼ不可能の解釈に限定されるように感じられる。自発は肯定文、可能は否定文に偏って現れるという傾向があると把握できる。この点に関しては、意志が有るか無いか、事態が実現するかしないか、という観点において、特殊な捉え方をした場合に見られるものであると考えられている(尾上圭介 2003)。自発と可能に関しては、格表示の仕方が同様であっても、述べられる情報に違いがあり、その違いそのものや、結果として現れる肯否という差異が条件となり、解釈が決定されるといえる。以上より、ラレル形式を取らない文との格交替の様相が共通している自発・受身を対象とし、解釈決定の要因を探る。

また、自発・受身両用法を決定づける条件の分析が本稿の目的であるから、ラレル型述語となる動詞は思考動詞「思う」「考える」に限定する。これらの動詞による自発は、堀川智也(1992)によって「ある事態に対する判断が可能になることを表わす(p.180)」判断型に分類されるものである。次の2例は、判断型の自発である。

(13) 彼が犯人だと思われる。

(14) 損害は一億円に上ることが見込まれる。 堀川(1992 p.172、下線は筆者による)

堀川(1992)は自発用法を、判断型の他、「惜しむ」「悔やむ」などの動詞によって「何等かの感情・気持ちがひとりでに生じてくる(p.172)」という意味を持つ感情生起型、「思い出す」「感じる」などによって「ある対象が、自然に意識にのぼってくる、想起されてくる(p.179)」想起型に分類している。感情生起型及び想起型は、ごく自然な自発用法であるが、受身としては用いられにくく、自発と受身の決定的な違いを分析する対象として適切であるといえない。やはり同一の動詞を対象とすべきであろう。また「思う」は、「残念に思われる」のように形容詞／形容動詞の連用形に後接する形で用いられた場合、感情生起型になると指摘される。そのようなものについては堀川(1992)で、動詞が存在しないという穴を埋めるために用いられた表現である可能性が言及されており、判断型となる「思う」とは区別するべきであると考えられる。

3.2 自発・受身の人称とテンスの意味

テイル形を取らない思考動詞の場合と同様に、自発・受身となるラレル文の人称とル形のテンス的意味、テイル形の後接可否を確認し、各用法の成立条件を分析する。ここで述べる人称とは、ラレル形式を取らない思考動詞文ではガ格をとり、思考動詞ラレル文においてニ格をとる〈経験者〉としての主体にかかわるものをいう。

(15) 花子「太郎さんは、誰を疑っているのですか」

太郎「僕には、〇〇が犯人だと思われる」 [自発]

(16) 太郎「〇〇が当時現場近くにいたこと、聞かれたので言っていました」

花子「なんてことを！ それでは、警察に〇〇が犯人だと思われる」 [受身]

ラレル型述語「思われる」文のうち、(15)は自発、(16)は受身に解釈されるのが自然である。ところが同じ「思われる」という形でも、(15)の自発は発話時から見た現在時のことを表わし、〈経験者〉が「僕」と、一人称主体をとる。

(15) 花子「太郎さんは、誰を疑っているのですか」

太郎「僕には{今のところ／*今に}、〇〇が犯人だと思われる」 [自発]

(17) 太郎「あの人には、〇〇が犯人だと思われる」 [受身]

(15')のように発話時点そのものを指す「今のところ」と共起することから、ル形で未来ではなく現在を表すことが分かる。(15')の発話時には、既に「〇〇が犯人である」ことについての太郎の思考活動は成立している。発話時を基準とした未来を表す「今に」との共起は不自然である。また(17)は、主体が話し手ではない思考動詞ラレル文であるが、自発ではなく受身のように感じられる。実際の用例⁵においても、自発用法の主文末ル形は、発話時から見た現在を指す。一人称主体が文中に現れていないが、いずれの例も話し手が主体であると判断できるものである。

(18) 「上野動物園のシマウマについてのヨコジマは、ベルリン動物園のシマウマのタテジマがヨコについてものだと思われる」(ブン) [自発]

(19) 「いま世界を見渡して、大ロシア皇帝に対し、戦線の布告をなしうるような勇敢な国があるとは思われません」⁶(山本) [自発]

一方(16)のように、受身は人称が問題とならず、ル形が、発話時を基準とした未来に起こる出来事を指す。

(16') 太郎「〇〇が当時現場近くにいたこと、聞かれたので言ってしまいました」

花子「なんてことを！ それでは、{*今のところ／今に}警察に〇〇が犯人だと思われる」 [受身]

花子の発話は、警察が「〇〇が犯人である」という可能性についての言及に過ぎず、「思われる」という動詞述語で表される思考活動はまだ行われていない。「今のところ」「今に」との共起関係からも、自発・受身におけるル形のテンス的意味の違いは明らかである。ま

⁵ 『CD-ROM 版新潮文庫の100冊』のうち、翻訳作品を除いたものから採集。下線などは筆者による。

⁶ 否定表現を伴う思考動詞だが、可能動詞「思える」があることから、自発の解釈も認められると考えられる。

た受身文では、〈経験者〉としての主体の人称が制限されない。

現在時をル形で指す自発に対して、受身ではテイル形の後接により、現在における進行中の状態を表す。受身文には後接可能なテイル形が、自発文では許容されない。

(20) 太郎「*僕には、〇〇が犯人だと思われている」 [自発]

(21) 花子「〇〇が警察に犯人だと思われている」 [受身]

用例を見ても、現在を表す受身文は、従属節内に出現するものを除くと(22)(23)のように全てテイル形が後接する。

(22) 「ねえ、ねえ、お父さん。お父さんはつまり、藤原んちなどから見ると、半失業者だと思われているのよ」(太郎) [受身]

(23) 「アメリカでは、ノートンみたいにクレバーなボクサーじゃないと思われてるぜ、つまり馬鹿だって」(一瞬) [受身]

受身は自発と異なり、主体の人称制限が見られない。ただ、多くの場合三人称をとっている。

これら現象面に関する指摘は先行研究でも見られる。自発のル形が発話時現在を指す現象については、植田(1998)で言及されている。また仁田(1991)は、「～ト思ワレル」「～ト考エラレル」などが判断のモダリティ形式に近づいており、ル形でも発話時現在を表わせると述べている。川村大(2004)もまた、現在を指す場合、自発はテイル形ではなくル形を用いるが、受身ではテイル形が一般的であるとする。主体の人称という条件については、自発文は通常一人称をとるという指摘が森山(1988)に見られる。

2 節で、思考動詞が表明・表出文となる条件として、一人称主体をとり、ル形で発話時現在を指すという点を確認した。また、先行研究における現象の把握及び小説中の用例より、自発文は、発話時現在をル形で指し、一人称主体をとるが、受身文が現在を指す際にはテイル形となり、主体の人称も制限されないことが分かる。この事実は、ラレル形式の解釈として、一人称主体をとり、ル形で発話時現在を指すという表明・表出文となる条件を備えた思考動詞文においては自発、人称に制限がなく、ル形で未来を指す動作動詞として働く思考動詞文では受身が、それぞれ成立することを示す。対象とした自発がすべて判

断型であるから、表明・表出の条件を備えている文の分類に従うと、態度表明文ということになる。森山(1988)が、自発用法が成立する動詞は表出の表現となる内的なものであると述べるのも、自発が表明・表出と同じ条件で成立するからであると考えられる。

以上まとめたように、表明・表出となる条件が、自発・受身の解釈成立に関わっているといえる。表明・表出という働きは、思考動詞などの内的な動詞に見られる現象である。現代日本語において、ラレル形式の付加により自発文となる動詞が思考動詞に偏るのは、思考動詞が、多くの場合は動作動詞として機能するが、特定の条件においては態度表明文になるという性質による。このような特殊な性質故、思考動詞によるラレル文に自発用法が典型的との把握がなされてきたと考えられる。

4. ラレル文のアスペクト

自発・受身文に後接するアスペクト形式や、アスペクト的意味に違いが生じることは先行研究によって既に指摘されているが、それらの違いが生じるのは、3 節で明らかにした自発・受身の成立環境の違いによるものである可能性を述べる。

4.1 現象の確認

既に述べたが、受身には、自発の場合は不自然となるテイル(テイタ)形の後接が可能で、現在あるいは過去における進行中の状態を表す。

- (24) 「ねえ、ねえ、お父さん。お父さんはつまり、藤原んちなどから見ると、半失業者だと思われているのよ」(太郎) [受身] ((22)再掲)

- (25) 「蛭はあの魚の使者だと思われていたのよ。要するに手下のようなものね。(略)」(世界) [受身]

他にも、アスペクトの観点からは次のような違いが見られる。自発用法としてのラレル文にテイル形が後接すると不自然だが、テクル(テキタ)形の付加は許容され、状態の出現を表す。

(26) 「そう言われると、〇〇さんが犯人だと思われ{てくる／てきた}」 [自発]

(27) 「いいのよ。もう私の機嫌は直ったわ。お風呂に入って、あったまって、元気が
でてくると、一日中、歩きつづけたことが、なにかこう楽しいことのように思
われて来るのよ」(孤高) [自発]

この点は森山(1988)にも、自発では「出現のテクルで表されるように、始動的な意味が取り上げられ、それ以外の意味は問題にならない(p.132)」という記述が見られる。

一方受身では、テクル形の後接は許容されないが、テキタ形は付加可能で、自発とは異なり、長期的継続を表す(植田 1998)。

(28) 「〇〇さんは、20 年もの間、犯人だと思われ{*てくる／てきた}」 [受身]

次の「て過ぎてまいりました」はテキタと同様の働きをしていると考えられる。

(29) 「わたくし、亡き父宮にも、強情もの、と思われて過ぎてまいりましたの。いま
さら周囲に押し流されるようにして結婚するのは、わたくしに似つかわしくござ
いませんわ」(新源氏) [受身]

テクル(テキタ)が後接する自発文には、仁田(2002)によって変化の進展を表すとされる「だんだん」「次第に」といった副詞が共起する⁷。受身文においては「だんだん」「次第に」ではなく、持続性のある事態を表す「長年」「ずっと」が共起する。

(27') 「一日中、歩きつづけたことが、{だんだん／次第に／*長年／*ずっと}なにかこ
う楽しいことのように思われて来るのよ」 [自発]

(29') 「わたくし、亡き父宮にも、{*だんだん／*次第に／長年／ずっと}強情もの、と
思われて過ぎてまいりましたの」 [受身]

⁷ 仁田(2002)によると、「(略)変化ではないものの、事態の存続・展開によって、事態の実現度に漸次的拡大の生じるものであ(p.243)」れば共起可能であるという。(26)(27)のような自発文はこの類であると考えられる。

自発にはテイル形の後接が許容されないが、テクル(テキタ)形で状態の出現の意味を持つ。受身はテイル形で状態の継続を表すことができる。また、テクル形の後接はできないが、テキタ形が長期的継続を表す。

なお、受身文におけるアスペクト形式の後接可否・アスペクトの意味は、ラレル形式が後接せず、思考動詞が動作動詞として働いた場合と共通している。一人称主体をとる思考動詞文が必ずしも態度表明文になるとは限らないが、三人称主体であれば、ル形で未来を指す動作動詞文である。その場合、テイル(テイタ)の後接が可能で進行中の状態を表し、テキタが長期的継続に解釈される。

(30) 警察が○○を犯人だと思う。

- a. 花子「警察は、○○が犯人だと思っています／思っていました」
- b. 花子「警察は、{*だんだん／*次第に／長年／ずっと}○○が犯人だと思ってきました」
- c. 花子「*警察は、{だんだん／次第に／長年／ずっと}○○が犯人だと思ってきます」

(30a)のテイル(テイタ)形は共に共起可能で進行中を表す。(30b)は「長年」「ずっと」が共起することから、テキタ形が状態の出現ではなく長期的継続を表すといえる。(30c)からは、いずれの用法であってもテクル形の後接が不可能であることが分かる。自発のアスペクト形式に関する様相は、(30)で見たような動作動詞の場合のものとは異なっている。動作動詞としての思考動詞と受身との間に見られるアスペクト形式の後接可否・アスペクトの意味の共通点は、自発においては見られない。

4.2 ル形が表すテンス的意味とアスペクトとの関連

アスペクトに関して、受身には見られる思考動詞との共通点が、自発では見られないという現象について、各ラレル文のル形が表すテンス的意味の違いに注目し、説明を試みる。

まずは自発・受身ル形のテンス的意味を、共起する副詞を手掛かりに、より詳細に見ていく。表明文は、動作動詞として働く思考動詞とは異なり、ル形で発話時現在を指すとい

う条件下で成立する。同様の環境で成立する自発文が「今のところ」と共起し、ル形のテンス的意味が現在であることはすでに確認した。ところが、仁田(2002)において「今のところ」と同じく、発話時を含む時間帯を表す成分とされる「今」「今日」との共起は、容認度に違いが見られる。いずれの成分も、発話時を含む時間帯を表してはいるが、その時間の範囲に違いがあるという。

(15”) 花子「太郎さんは、誰を疑っているのですか」

太郎「僕には、{今のところ／?今／*今日}〇〇が犯人だと思われる」〔自発〕

「今のところ」は発話時点を指すが、「今日」は発話時を含んだ幅のある時間帯を表し、「今」はどちらの性質も併せ持つ存在である(仁田 2002)。表明となる動詞文は、ル形で現在を指しているとはいえ、幅のある時間的展開までは含意しない。

一方ル形の受身は、「今に」「今後」「いずれ」が共起する。これらは発話時以後の未来を指すものである。動詞のル形が発話時以後の未来を指すということは、森山(1988)の記述によると、その動詞で表される事態は時間的に幅を持つものであるということだといえる。

(略)動きを表す動詞のスル形は、一般に未来を指す。／これは、発話の時点という極めつけの一時点(瞬時)において、動きを表す非状態的な述語が、その動きの両端を区切って(一まとまりにして)とりあげられないということを表すものである。(p.264)

ル形で未来を指す動作動詞、例えば「壊す」であれば、「壊す」という主体動作の開始から「壊れる」という対象変化までの、時間的な展開の過程を持つ動きを表す。表明となる条件を満たさない受身文は、思考動詞が、非状態的で動きを表す動詞、つまり動作動詞として働いているといえる。

では、これらの違いによって、なぜアスペクトに関する相違が見られるのだろうか。受身では(24)(25)のように自然であるテイル形の後接が、自発の場合は不自然である。自発文にテイルの後接が許容されないのは、自発となるラレル文が、表明文として機能しているからであると考えられる。

表明文は、その事態が成立する時間的展開が特徴的である。時間幅のある均質的な動きを表す動詞は、時点を表す時間的成分が共起しにくい(日本語記述文法研究会編 2007)。

(31) ?今朝 6 時、勉強した。

(31)の動詞「勉強する」は、瞬間的な動きを表すわけではなく、均質な動きが時間幅を持って展開される。その一方で、時間幅がない動きを表す動詞であれば、副詞的成分によって動き・変化の成立時点に焦点を当てることができる。

(32) 太郎は深夜 3 時半に、テレビのスイッチをつけた。

(33) 雷が落ちた瞬間、パソコンが壊れた。

思考動詞は継続的な動作を表す動詞であるから、時点を表す成分は共起しないはずである。ところが、(31)と比較すると、思考動詞文(34)は共起が自然なものとなっている。

(34) 太郎「昨夜 8 時、実は次郎もずっと花子のことが好きだったのではないかと考えた」

日本語記述文法研究会編(2007)によると、状況の変化を捉えるような文脈においては、時間幅のある均質的な動きを表す動詞であっても、動きの開始時点を副詞的成分で捉えることができる場合があるという。

(35) 大雨で止まっていた電車が午後 6 時に動いた。(日本語記述文法研究会編 2007 p.25)

午後 6 時以前は止まっていた電車が、午後 6 時という成分が指す時点に動き始めたという状況変化を表す。午後 6 時という時点は、「(動いていなかったものが)動く」という、瞬間的な変化の開始時点である。(34)の思考動詞も、午後 8 時以前には思いつかなかった考えが、午後 8 時という時点において浮かんだ、という解釈ができ、状況変化を表すといえる。午後 8 時は、「(それまでにはなかった考えを)考える」という状況変化開始の時点となる。

思考動詞による状況変化の開始時点を把握するということは、態度表明という思考動詞文の働きと関係が深い。態度表明とは、それまで思考の対象でなかった内容に関して思考するようになった瞬間、あるいは、思考はしていたが、言語で述べていなかった内容を表

現した瞬間に見られる働きである。従って態度表明もまた、思考活動あるいは言語による表現を行っていなかった段階から、ある時点においてそれらの活動を行い始めるという(35)同様の状況変化を表しているものだといえる。

受身文と異なり、自発文にテイル形の後接が許容されないのは、自発文が態度表明と同じ環境で成立し、性質が類似しているからである。態度表明は未来を含まない、発話時現在における状況の変化を表す。出来事そのものに幅がなく、継続性を表すことができない上、結果を残す動きでもない。それ故、テイル形の付加が許容されないといえる。

受身の場合テイル形の後接が自然であるのは、受身文における思考動詞が動作動詞として機能しており、瞬間的ではなく、時間的幅を持つ動きを表すからである。このアスペクト的性質と受身用法は深く関連している。受身文のル形が表す事態は、発話時という一点的なものではなく時間的な幅を持つ。思考動詞は、主体や対象の変化を表さず、終了限界は内在しないが、動作動詞として、発動以後の時間的幅を持つ動作を表すことができ、動作開始後、その動作によって何かの形で他者に働きかけるという事態まで読み込むことが可能となる。つまり、働きかけを含意している。それ故、「動作の受け手がどうなるか」という事象の結果性を表す受身文の意味機能(林青樺 2009 p.108)」を、動作動詞としての思考動詞が担うことができる。思考動詞は変化動詞ではなく、厳密な意味での結果性とはいえないが、対象への働きかけを表すと考えられる。この動詞の性質により、思考動詞ラレル文が受身として成立し得る。

同様に、テクル(テキタ)形の後接可否や用法による意味の違いについても、態度表明文としての性質という観点から、次のように分析される。自発文に後接するテクル(テキタ)形は、状態の出現や変化の進展という意味を表す。一方受身ではテキタ形のみが許容され、長期的な継続を表す。思考動詞による表明という機能は、表明以前の状態からの変化を表しているということになる。表明という、表明以前の段階からの状況変化を述べる働きを思考動詞が果たしており、自発は、思考状況の変化や思考内容の出現を表していることになる。それ故に、テクル(テキタ)形が状態の出現や変化の進展を表す。表明文と同じ環境で成立するラレル文は、動作の発動時に重点が置かれる表現であるから、森山(1988)で「新たに何かは自然と出現してくる(p.128-9)」意味を持つとされる自発解釈が成り立つといえる。テクル(テキタ)形が長期的継続を表さないのは、表明という、発話時現在の一時点における状況変化が長期間に亘って続くとは考えられないからである。一方受身では動作の受け手が焦点化されるから、後接するテキタ形は、いわゆる動作の受け手が被った影響の

長期的な継続を表す。

5. おわりに

思考動詞ラレル文の自発・受身用法は、態度表明文となる条件を満たしているか否かによって決定していると結論付けられる。思考動詞は動作動詞でありながら、ル形で現在を指し、一人称主体を取ると表明文になる。自発はこの表明文と同様の条件を備えている。他の動作動詞とは異なり、思考動詞はこのような条件下において表明文になるという性質を有している。それ故、自発が思考動詞に特徴的なものとなると考えられる。また、自発が動作の非意図的な発動を表すとされるのも、表明文としての条件を満たしているからであろう。一方、動作動詞としての働きしか見られない条件下では、思考動詞ラレル文は受身となる。受身文は、ル形で動作の開始限界以降の、変化や対象への働きかけを捉えて表現するものである。発話時における動作の発動だけでなく、その後の時間的な幅を有する事態も含意するという性質は、対象がどうなるかということに視点が置かれる受身文の本質に沿う。

表明文になる性質を持つ思考動詞だけでなく、認識に関わる動詞「見る」もまた、ラレル型述語となった場合、用法によってル形のテンス的意味が異なる。

- (36) 「(略)ご承知の通り、ロンドンの地下鉄は、非常に深く、これは絶対安全な避難所で、誰もおびえたり泣き言を言ったりしている者はおらず、混乱もほとんど見られません。(略)」(山本) [自発]

(36)は否定文だが、自発用法においてル形が指すのは現在で、主体は一人称である。(37)の受身文では、ル形が未来を表し、主体も一人称に制限されない。

- (37) 「でも一般の人にとっては同じことよ。疑いの目で見られるわ。尾島さんも近所から白い目で見られるんじゃないかしら。そのうちに無理心中とかー」(女社長) [受身]

「見られる」という動詞述語でも、ル形が表すテンス的意味とラレル文の用法の間に相関

があり、思考動詞以外の動詞文においても、表明文となるか否かに見られるものと同様の条件が、自発・受身の解釈決定に関わっていることが分かる。

なお、今回考察の対象外とした感情生起型及び想起型自発となり得る動詞に関しても、次のことが確認された。(38)の想起型自発文でも、判断型と同じく、ル形で現在を指し一人称主体であるという表明文となる条件を満たしている。また、(39)のように受身文となる場合、ル形で指示するのは未来であり、人称も制限されない。

(38) 「まるで、南フランスのニースか、カンヌやリヴィエラそっくりではないか。この風景を見ると、ニースやカンヌやリヴィエラのことが、しみじみ思い出されるなあ。(略)」(ブン) [自発]

(39) 「こんなに遅くまでおひきとめして、Mさんのお母さまに恨まれますよ」(聖少女) [受身]

問題としたはなしあいのテキストからの用例ではないが、テクル(テキタ)の後接可否や解釈も、判断型自発となる動詞と同様の様相を見せる。

(40) 在所から売られてきた娘の、今日の行列のさまざまが思い出されて来る。(放浪記) [自発]

(40') 今日の行列のさまざまが、{だんだん／次第に／*長年／*ずっと}思い出されて来る。 [自発]

(41) そのうちに不図、先程の花火が思い出されて来た。(檸檬) [自発]

(41') 先程の花火が{だんだん／次第に／*長年／*ずっと}思い出されて来た。⁸ [自発]

受身文では許容されないテクルの後接が見られ、その解釈も状態の出現や変化の進展であることが分かる。感情生起型・想起型自発になり得る動詞が受身として用いられにくいということは、これらの動詞の性質と、表明・表出文としての条件が何等かの形で深く関連している可能性が考えられる。この点の分析は今後の課題としたい。

以上、先行研究で指摘されてきた自発・受身に後接するアスペクト形式・アスペクト的意味の違いは、各用法における動詞が表す事態の違いに拠ること、また、自発用法が思考

動詞に特徴的であるのも、ある条件下において表明文になるという思考動詞の性質によるものであることを述べた。

引用文献

- 植田瑞子(1998)「「自発」表現の一考察——自発文の二系列——」『日本語教育』96号 pp.109-20
- 尾上圭介(2003)「ラレル文の多義性と主語」『言語』32巻4号
- 川村大(2004)「受身・自発・可能・尊敬——動詞ラレル形の世界——」尾上圭介編『朝倉日本語講座6』朝倉書店 pp.105-27
- 金水敏(1989)「「報告」についての覚書」、仁田義雄、益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版(pp.121-9)
- 金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」(金田一春彦編(1970)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房に再録 pp7-26)
- (1955)「日本語動詞のテンスとアスペクト」(金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房に再録 pp.29-61)
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——』ひつじ書房
- 鈴木重幸(1957)「日本語の動詞のすがた(アスペクト)について——～スルの形と～シテイルの形——」、(金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房に再録 pp.65-81)
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- (2002)『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会編(2007)『現代日本語文法3』くろしお出版
- 堀川智也(1992)「現代日本語の自発について」『言語文化部紀要』22 pp.171-83
- 森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の記述的研究』明治書院
- 森山卓郎・渋谷勝己(1988)「いわゆる自発について——山形市方言を中心に——」『国語学』152集 pp.47-59

⁸ 自発文とした場合、「長年」「ずっと」の共起は許容されない。

林青樺(2009)『現代日本語におけるヴォイスの諸相 事象のあり方との関わりから』くろ
しお出版

用例出典

『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』新潮社

略称 (ブン)『ブンとフン』、(山本)『山本五十六』、(路傍)『路傍の石』、(太郎)『太郎物語』、
(一瞬)『一瞬の夏』、(世界)『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』、(孤高)『孤
高の人』、(新源氏)『新源氏物語』、(女社長)『女社長に乾杯！』

第4章

可能動詞による自発表現

——可能動詞の意味分化を契機として発生した可能性について——

1. はじめに

現代語において自発を表すことができる動詞は、(1) のような思考動詞に限られる。

(1) 私には、昔のことが懐かしく思い出される。

このような自発の用法は上代から存在しており、ラレル文¹において動詞述部を成す助動詞(ラ)レルの古形(ラ)ルから後発的に発生したわけではない。

また、ラレル文が可能を表すことがあるが、現代語の一部の動詞においては可能動詞²を用いることが一般的である。(2)～(4)は、五段活用動詞「走る」について可能を表す際、可能動詞を用いるのが自然であることを示す。

(2) 私は100メートルを11秒で{走れた／走ることができた}。 [可能]³

(3) #私は100メートルを11秒で走られた。 [可能]⁴

(4) 私はライバルに、100メートルを11秒で走られた。 [受身]

現代語において、動詞「笑う」の可能動詞「笑える」は、可能だけでなく自発にも解釈されることがある。

(5) 時間が経って悲しみも癒え、ようやく笑えるようになった。 [可能]

(6) ひょうきんな彼を見ていると、自然と笑えてくる。 [自発]

¹ 文末に(ラ)レル形式が付加されたものを指す。

² 五段活用動詞の語幹の一部に、接辞「-eru」が後接したもの。

³ ラレル文の解釈は□で示す。

⁴ 例文頭の#は、当該の解釈としては成立しないことを表す。なお、*は文法的に非文であることを表す。

ラレル文は多義に解釈されるが、その解釈の一つでもある可能を表す専用形式である可能動詞に、自発用法であると判断できるようなものが存在するのは何故か。この可能動詞による自発は、渋谷勝己（1993）によると、江戸期には見られない用法であったという。本章では、可能動詞による自発表現が生じた要因について、可能動詞の性質と自発文の成立条件との関連から説明を試みる。

2. 先行研究

ラレル文は自発・受身・尊敬・可能の意味を表す。中でも自発は、自動詞と関連付けて論じられることが多い。しかし、格の取り方や、そもそも述部に助動詞を伴うか否かという違いがあるため、区別すべきだという考えもある。一方、可能動詞による自発は、格体制や形式の面で、可能の意味を表す可能動詞との違いが見られない。従って、可能動詞が、可能だけでなく自発の意味を表す原理について説明を試みる必要がある。

本節では、ラレル文によって表される自発と可能の連続性と、可能動詞の用法について、可能についての体系的な先行研究である渋谷（1993）を中心に確認する。

2.1 自発と可能の派生関係

可能は、現代語において、自発と考えられる文の否定形に出現が偏ることから、古代語においても自発から派生したものであるとみられることがある。このように考えているのは、森山卓郎（1989）、渋谷（2005）である。森山（1989）によると、自発が表すのは動きの発生が非意図的であることであり、その動きの発生の背後は注目されない故、その非意図的な動きの発生を否定すると、文において表現すべきことがなくなってしまうため、背景化された動作主を取り上げることになり、不可能の意味に近くなる、と説明される。また、渋谷（2005）は、可能と、期待逸脱型自発⁵に分類される自発との連続性は、否定文において、「実現しないのはいずれも動作主体が期待する行為である（p.37）」という点で違いがなく、自発と可能が近づくと述べている。

その一方で川村大（2012）は、非意図的な動きの発生を表す自発をいくら否定しても、意図的な行為が発生しないことは表さないとし、自発と可能とが意味的な連続性を持ち、

派生関係にあるとは考えない⁶。

しかし、いずれにせよ、可能を表す形式から自発の意味が生じたとは考えられていない点に注目すべきであると考ええる。

2.2 可能動詞の用法の分類

可能を表す際に用いられる可能動詞成立の経緯には諸説あるが、江戸時代中期以降に生産的に発生したと考えられている（渋谷 1993、青木博史 1998）。

続いて、可能をさまざまに分類した渋谷（1993）を見ていく。渋谷（1993）によると、可能は、その動作成立の条件によって、心情可能、能力可能、内的条件可能、外的条件可能、外的強制条件可能に分類され⁷、自発は、成立のための条件が動作主外にあり、動作主の意志が全く介入しないことがらであることから、外的強制条件可能とされる。また、江戸時代の可能動詞は、状況可能、能力可能、心情可能のいずれにも用いられたが、外的強制条件可能（自発）と見られる例は存在していないことも、渋谷（1993）に指摘されている。

さらに、可能を表す文は、上のような条件によるものの他に、動作の実現を含意するかどうかという基準により、実現系可能と潜在系可能にも分類される。

(7) 昨日の競技会では、100 メートルを 11 秒で走れた。

(8) 学生の頃は 100 メートルを 11 秒で走れた。

(7) のように、実現系可能は一回的な動作の実現を表し、動作性が高い。一方 (8) のような潜在系可能は、動作の実現の有無は問題にされない。また潜在系可能には、ル形で現在指示をしたり、テイル形を取らなかったりするなど、状態性述語と共通する性質が見ら

⁵ 「動作主体の期待とは異なる事態が自然生起する（渋谷 2005 p.36）」ものを指す。

⁶ 尾上圭介（1998a 他）、川村（2012）は、「出来」という事態の捉え方が、ラレル形述語文に共通するという立場をとっている。

⁷ 心情可能は、動作主の心的状態が条件となる可能文「悩みがあるので集中して走れない」のようなものをいう。「チーターは時速 100 キロメートルの速さで走れる」のように、動作主に備わっている能力に起因するものを能力可能とする。内的条件可能は「ケガをしているから長距離は走れない」のように、動作主体内の条件によるものを指す。外的条件可能は「トラックのコンディションが良いので、100 メートルを 11 秒で走れそうだ」といった、動作主体外の条件による可能を表す。

れる。ただし、実現系可能の中に、成立の条件によって分類されないものがある。渋谷(1993)で、「結果可能」とされるものである。これは、動作成立の条件に関わらず、実現の有無だけを問題にするというものである。

(9) (鉄棒で、今までできなかったわざをはじめて成功させて) できた！ (p.29)

状態的な潜在可能でも特に特徴的なのが、渋谷(1993)において「評価的属性段階」と呼ばれるものである。「評価的属性段階」は、形容詞化が進む潜在可能の中でも、最も形容詞化が進んだ段階であるとされる。

(10) あいつはとても話せる奴だ。

(11) この魚は見た目がグロテスクだがなかなか食える。

対象「あいつ」「この魚」の恒常的な属性を表すだけでなく、対象に対する話し手の評価までも表す。また、この段階の可能文は、可能動詞によって表されることが多いことも指摘されている。

(12) #あいつはとても話すことができる奴だ。

(13) ??この魚は見た目がグロテスクだがなかなか食べることができる。

可能動詞が、他の可能形式のように実現系可能と潜在系可能を表すこと、潜在系可能の新たな段階である評価的属性段階を表すことができる特徴的な形式であることが、先行研究から確認できた。可能動詞による可能は、aのように動作成立の条件で分類することも、bのように実現性の有無で分類することもできるということである。ただし、実現性の有無により分類される実現系可能である結果可能は、動作成立の条件で分類することはできない。

(14) 可能動詞が表し得る可能

a. 動作成立の条件による分類

心情可能

能力可能

内的条件可能

外的条件可能

外的強制条件可能（自発）

b. 実現性の有無による分類

実現系可能

結果可能

潜在系可能⁸

評価的属性段階

3. 可能動詞と自発との関連

可能動詞「笑える」が、現代語において、自発を表すと判断できることがある。

(15) あの映画、本当に笑えてくるよ。是非見に行ってください。

発生した当初⁹は表すことがなかった自発の用法を、可能動詞が獲得できたのはなぜか。本節では、ラレル文による自発の特徴を整理した上で、可能動詞の諸用法との関連から説明を試みる。

⁸ 渋谷（1993）は、評価的属性段階以前の形容詞化の度合いとして、動作主体・対象などの一時的な状態を表す「一時的状態段階」、動作主体・対象などの恒常的な属性を表す「恒常的属性段階」があることにも触れている。

⁹ 渋谷（1993）によると、江戸語の可能動詞には、自発に解釈できるものはみられないという。なお、現代語の「笑ふ」の可能動詞形「笑へる」は、1909年の雑誌『太陽』記事中に現れている。

3.1 自発の特徴

現代日本語ラレル文が、次のように自発を表すことがある。

(16) 私には、あの日のできごとが昨日のことにように思い出されます。〔自発〕

(17) 現場に残されたものから、我々には、太郎が犯人ではないかと思われる。

〔自発〕

(18) 一刻も早い救助が待たれます。〔自発〕

現代語のラレル文によって表される自発には、いくつかの特徴がある。まず、自発に解釈されるラレル文は、助動詞（ラ）レルが接続する動詞が思考を表す内的な動詞に限られる。また、ル形が指す時制は現在であり、テイル形の付加は許容されにくい（植田瑞子 1998 他）。この特徴は、受身文が現在を指示する際にテイル形をとるのとは対照的である。さらに（16）、（17）に見られるように、自発文は一人称主体を取るのが一般的である（森山 1988）。（18）も、補うのであれば一人称を含む主体である。

（18'）（我々には）一刻も早い救助が待たれます。

ル形で現在を指し、一人称主語をとるというこれらの特徴は、内的状態動詞¹⁰が態度表明文となる際の条件として、工藤真由美（1995）で述べられているものと一致する（高橋芽衣子 2012）。

3.2 可能動詞の諸用法の特徴

3.2.1 人称

2.2 で見たように、可能を表す形式、特に可能動詞が表す潜在系可能には、評価的属性

ることが小木曾智信（2002）によって確認されている。

¹⁰ アスペクト対立の有無から、外的運動動詞と静態動詞とに分類した上で、アスペクトの対立が人称とも関わっている動詞を内的状態動詞としている（工藤 1995）。

段階というものがある。

(10) あいつはとても話せる奴だ。(再掲)

(11) この魚は見た目がグロテスクだがなかなか食える。(再掲)

実現の有無を問題にしない潜在系可能であり、対象の属性だけでなく、対象に対する話し手の評価をも表し、形式的には可能動詞がよく用いられる。

ここで、評価的属性段階を表す潜在系可能の人称について注目したい。評価的属性段階の可能動詞文は、対象に対する話し手の評価を表すものである。(10) は「あいつ」、(11) は「この魚」について、それぞれ「話が通じる」、「味は悪くない」という評価を下している。モダリティ形式を含まないのであれば、評価者はいずれも話し手自身、あるいは話し手自身を含む人々であると考えるのが妥当であろう。

(19) この魚は見た目がグロテスクだがなかなか食えるらしい。

(19) について、「この魚」について「なかなか食える (=それなりにおいしい)」という評価を下しているのは誰だろうか。モダリティ形式「らしい」により、評価者として話し手自身を想定することは困難である。逆に述べると、(19) のように、評価者が話し手以外の人物である場合、モダリティ形式「らしい」が後接するといえる。次の (20a)、(20b) の比較からも、評価者が話し手でない場合はモダリティ形式が必要であることが分かる。

(20) a. *聞くとところによると、この魚は見た目がグロテスクだがなかなか食える。

b. 聞くとところによると、この魚は見た目がグロテスクだがなかなか食える {らしい／そうだ}。

しかしながら、動作をする人物が必ずしも話し手である必要はない。

(21) お前にとって、あいつはとても話せる奴であるはずだから、困ったときには頼るといい。

(21) では、評価を下しているのは話し手ではあるが、「話す」という動作をする人物は二人称「あいつ」である。(19) においても同様に、見た目がグロテスクな魚を「食う」という動作をする人物は、誰であっても構わない。評価的属性段階を表す可能動詞文は、その評価を下すのは基本的には話し手だが、動作主に人称制限はないといえる。

一方、実現系可能は、(22) のように語りの文であれば、人称は問題にならない。しかし語りの文ではなく発話を想定するのであれば、(23) のように一人称や、(24) のように疑問文での二人称が自然であるように感じられる。

(22) 佐藤はようやく笑えたのである。

(23) 私はようやく笑えた。

(24) (久しぶりに笑っている友人に対して) ようやく笑えた？

この傾向は、結果可能表現においても同様である。

(9) (鉄棒で、今までできなかったわざをはじめて成功させて) できた！

(渋谷 1993 p.29)

この発話が最も自然なものとなるのは、鉄棒の技を成功させた本人であるだろう。例えば、鉄棒の指導者の、選手がはじめて技を成功させたときの発話も想定されるかもしれない。こういった場合は、鉄棒の指導者の視点が選手に近くなっているために許容されるのではないかと考えられる。選手と全く関係のない人物の発話としては、不自然ではないだろうか。

なお、可能動詞による自発もまた、実現系可能と同様に動作主は一人称である。

(24) (コメディ映画を観終えて) あー、(私は) 笑えた。

3.2.2 実現性の有無

潜在系可能とは、既に述べているが、実現の有無を問題にしない種類の可能であり、実現系可能とは区別される。

(7) 昨日の競技会では、100 メートルを 11 秒で走れた。(再掲)

(8) 学生の頃は 100 メートルを 11 秒で走れた。(再掲)

(7) は、昨日の時点で実現したことを述べる文であるので実現系可能、(8) は、学生の頃に能力が備わっていたことを述べる文であり、実現したことを取り上げて述べているわけではないので、潜在系可能に分類される。実現系可能が動作的であるのに対して、潜在系可能が状態的であることは、ル形で指示する時が異なることからいえる。以下は渋谷(1993 pp.15-6) の例である。

(25) 今始めれば日暮れまでには書ける(「書き終わる」の意)

(26) どんなむずかしい字でも書ける

(25) は、ル形で未来を指す実現系可能、(26) は現在を指す潜在系可能であるとされる。

ここで、評価的属性段階の実現性について考えてみたい。評価的属性段階は潜在系可能に分類され、〈動作主体〉や〈対象〉の属性を表すだけでなく、それらについての評価を表すものである。潜在系可能は、実現の有無に焦点を当てた表現ではないので、一回的な事態の成立を表す実現系可能とは区別されるが、実現の有無を完全に問題にしていないといえるのだろうか。

(7) あいつはとても話せる奴だ。

(8) この魚は見た目がグロテスクだがなかなか食える。

確かに (7)、(8) のような例は、「あいつ」、「この魚」に対する評価を下し、成立の有無までは問題にしないようなものである。

(27) (融通を無理やりきかせてくれた相手に対して) 話せるねえ。

(28) (見た目がグロテスクな魚を、勇気を振り絞って食べて) いける！

ところが (27)、(28) では「話せる」「いける」という動きがまさに実現されている。確

かに(27)ではある人物に対する「話が通じる相手である」という評価を、(28)では見た目がグロテスクな魚に対する「意外とおいしい」という評価をそれぞれ下しており、潜在系可能の評価的属性段階であると判断できる。しかしこれらの文は、潜在系可能の評価的属性段階として、話し手による評価を表現する状態的な文というより、話し手自身に、そのような評価を下してしかるべき事態が発生したことを前提に、その時の話し手の評価を表現していると解釈するのが妥当ではないだろうか。(27)、(28)は、次のような結果可能表現に見えるかもしれない。

(29) (指に刺さった刺を抜こうと努力した結果、取り除くことができて) 抜けた！

しかし、(29)で表現しているのは、「抜く」という動作の実現そのものとしての「抜ける・抜けた」という可能である。一方、(27)、(28)は、「話す」に対する「話せる」、「いく」に対する「いける」という、事態の実現そのもの、そのみを表すわけではないので、典型的な実現系可能としての結果可能とは区別されなければならない。たしかに、(7)、(8)の潜在系可能も、評価を下す前に、そのような評価に至った事態が実現してはいるはずである。しかし、(27)、(28)は事態がまさに実現しているときに発話されており、(7)(8)の潜在系可能の評価的属性段階とは異なる。

話し手自身にとって「話せる」「いける」と評価を下すべき事態が生起した時点でなければ(27)、(28)のような表現は成り立たないことから、評価的属性段階を表す可能文に、実現の有無に関わらない、対象への評価を表すことを目的としたものと、実現したその時点での話し手の評価を述べるものとがあるといえる。

3.2.3 文中における出現位置と解釈

現代語の可能動詞「笑える」は、(30)のような実現系可能(不可能)、(31)のような潜在系可能の評価的属性段階、(32)のような自発、のように、多様な解釈が成り立つ。

(30) こんなに悲しいことが起こってしまっては、どうしたって笑えない。

(31) このお正月で一番笑える映画、是非、ご家族で！

(32) (漫画を読んで、笑いながら) この漫画、笑える。

注目すべきは、それぞれの解釈が自然に成立する場合、文中のどこに出現するかが異なる点である。以下、「笑える」を対象に、文中の出現場所について考察を進める。

主文末でテクルが後接していれば、「笑う」という動きが自然に発生したことを表す自発であると判断できる。

(33) あの時の顔を思い出すと、笑えてくる。

しかし、テクルが後接しないと、自発以外の読みの可能性が生じる。

(34) (突然噴き出し、笑いながら) あの時の顔を思い出すと、笑える。

(35) しばらくの間は、あの時の顔を思い出すと、笑える。

(34) は、発話時点における話し手の「面白い・愉快だ」といった感情を表し、自発的だが、(35) はル形で未来を指し、動作的な「笑える」という可能動詞であると解釈できる¹¹。

(35) の場合は、未来時における「笑える」という事態実現を表すことになるので、実現系可能である。テクルが後接しない主文末の「笑える」は、次のように潜在系可能も表す。

(36) この作品は非常に笑える。(だから自信を持って人に薦められる)

(36) は、作品を鑑賞して笑ったか笑っていないかという実現の有無を述べたものではない。また、鑑賞して「笑う」という動作が達成された時の評価をその時点において表明した文でもないので、自発を表すわけでもない。潜在系可能の評価的属性段階である。タ形の場合も多様に解釈される。

(37) あの時の顔は笑えた。

¹¹ 未来時点における感情の表出という解釈も可能である。つまり、未来時点における自発文であるということになる。態度表明文となる条件はル形で現在時点を指すことであり、ル形で現在の態度を表明するラレル文による自発文とは性質が異なっている。可能動詞による自発についてより深く考察し、今後解決すべき課題であると考ええる。

実現系可能として、過去における事態の実現も表すし、話し手の評価を過去時点において表明しているという読みもできる。

主文末であれば解釈に多義が生じる「笑える」ではあるが、主文末ではなく (38) のように名詞修飾節に出現する場合は、評価的属性段階の潜在系可能の解釈が自然で、自発としての読みはしにくいように感じられる。

(38) これは非常に笑える作品だ。(だから自信を持って人に薦められる)

この点については、評価的属性段階の潜在系可能の名詞修飾節に現れやすいのではなく、自発や、自発にも解釈できるような可能動詞が名詞修飾節に現れるのが不自然であるから、名詞修飾する可能動詞は潜在系可能の解釈が優位になると説明することができる。

日本語記述文法研究会 (2003) によると、表現類型のモダリティは格成分名詞修飾の中に現れることができないという (pp.60-1)。(38) の被修飾成分「作品」は、「この作品が笑える」とパラフレーズできることから分かるように、「笑える」の格成分である。従って、「笑える」が格成分「作品」を修飾する場合、「笑える」には表現類型のモダリティが含まれないはずである。表現類型のモダリティに含まれる叙述のモダリティは、話し手の判断を聞き手に伝えるという伝達的な機能を持ち、平叙文が担うとされ、次のような人称制限のある表出的な文も含むという (日本語記述文法研究会 2003 pp.17-20)。

(39) 私はさびしい。

(40) *佐藤はさびしい。

3.2.1 で見たように、評価的属性段階の潜在系可能には人称制限がない。故に、表出を表すとはいえない。つまり、評価的属性段階の潜在系可能「笑える」には、表現類型のモダリティが含まれていないといえる。叙述のモダリティが含まれていないのであれば格成分名詞修飾節内に出現し得るので、(38) のような「笑える」は、評価的属性段階の潜在可能として、自然に解釈される。言い換えると、格成分名詞修飾節における可能動詞で自発の読みができないのは、当該の可能動詞が叙述のモダリティを含んでいるからではないだろうか。

(41) 笑える (=評価的属性段階の潜在系可能) N

↑ 叙述のモダリティを表さない。

(41) の「笑える」は、叙述のモダリティを表さない評価的属性段階の潜在系可能なので、その解釈を保ったまま、名詞修飾できる。

(42) ??笑える (=自発) N

↑ 叙述のモダリティを表す。

一方、(42) のように、格成分名詞修飾節内の「笑える」を自発で解釈しようとする和不自然なものとなるのは、その「笑える」が叙述のモダリティを表しており、叙述のモダリティは、格成分名詞修飾の中に現れることができないからであるといえる。

叙述のモダリティを表す表出的な文を成す動詞は、格成分名詞修飾できない。逆に述べるならば、格成分名詞修飾できないということは、その動詞は叙述のモダリティを表していることになる。格成分名詞修飾節に現れており、自発の解釈をしようすると不自然になる可能動詞、つまり、自発的な可能動詞は、表出を表しているといえる。3.1 で、自発の成立条件は態度表明文となる条件と一致していることを確認したが、可能動詞による自発が表出的であるということは、ラレル形述語による自発の性質と類似している。ラレル形述語による自発に人称制限があり、ル形で現在を指すように、可能動詞による自発にも人称制限があり、(34) に見るように、ル形が指示するのは未来ではなく発話時現在の感情である。

(34) (突然嘔き出し、笑いながら) あの時の顔を思い出すと、笑える。(再掲)

なお、ラレル文による典型的な自発は主文末に多くみられ、名詞修飾節内に現れるラレル形の思考動詞は、受身との解釈が曖昧になる。

(43) 九州電力(本社・福岡市)が単独で提供しているすべてのテレビ番組が3月で終了する見通しになった。原発の運転停止などで業績が悪化した同社がスポンサーを降りるため。九州朝日放送(KBC)の「未来への羅針盤」やRKB毎

日放送の「窓をあけて九州」といった「老舗（しにせ）」番組も含まれており、
惜しまれる春の番組改編になりそうだ。（2013/3/2 朝日新聞朝刊）

（44）望まれる長期支援（2012/3/10 朝日新聞朝刊見出し）

可能動詞も、主文末であれば自発としての解釈が成立し得るが、名詞修飾節内に現れた場合、自発の読みがしにくいという点と類似している。

4. 可能動詞の自発用法獲得の契機

可能動詞が自発という意味を表わすようになったのは、可能動詞の用法が、微妙な特徴の違いを有した形で分化していったことがきっかけになっていると考えられる。

可能は、実現系可能と潜在系可能とに大別され、潜在系可能が後に評価的属性段階を表わすようになった。この評価的属性段階の可能は、通常の可能形式よりも可能動詞によって表されることが多い。この段階の可能は潜在系可能であるから、実現の有無を問題にしない表現ではあるものの、動詞で表される動きが話し手でもある動作主の身に実現していることが前提となっているはずである。また、(27) (28) のように、発話時点に実現したそのことについての評価を下していると判断できるものもある。

(27) (融通を無理やりきかせてくれた相手に対して) 話せるねえ。(再掲)

(28) (見た目がグロテスクな魚を、勇気を振り絞って食べて) いける！(再掲)

先行研究では、潜在系可能は動作性が低く、状態性が高い述語であるから、ル形で現在を指すことが指摘されている（渋谷 1993）。

話し手と動作主が同じ人物であるということは、一人称主語をとるということになる。可能動詞成立以前から存在していた実現系可能は、発話を想定した場合、一人称主語が自然である。また、名詞を修飾する可能動詞は潜在系可能の読みに偏るが、主文末に現れる場合は実現系可能にも解釈される。(37) は、評価的属性段階の可能を表すとも解釈できるが、過去の時点において、話し手の身に事態が実現したことも表す。

(37) あの時の顔は笑えた。(再掲)

ル形で現在を指示するような評価的属性段階の可能、主文末に現れ一人称主語を取ることが多い実現系可能、可能動詞がこの二つを表し得たことにより、自発の用法を獲得したのではないだろうか。可能動詞が自発の意味を表すようになる前から存在していたラレル形述語による自発は、一人称主語を取り、ル形で現在を指し、表出を表す条件下において成立している。可能動詞においても、一人称主語を取り、ル形で現在を指し、表出を表す、という条件を満たし得る動詞において、自発の用法を獲得するに至ったと考えられる。

自発の否定から不可能の意味が派生したとも考えられており、意味的にはさほど遠くない自発と可能が、同一形式で表されるのは十分に考えられることである。

5. まとめと今後の課題

可能動詞の用法が分化していったことにより、ラレル文による自発と同じく、表出となる文と類似の条件下で成立するようになったことがきっかけとなり、自発としても解釈されるようになったと結論付けた。

評価的属性段階の可能として、従来指摘されているような、実現の有無が焦点化されていないものの他、実現したまさにその時点において発話可能になるものもある。こちらの用法の性質をより詳細に記述することで、可能動詞と自発との関係の把握をさらに進められる可能性がある。

現代語ラレル文による自発は思考動詞が典型的だが、「笑う」や「泣く」といった動詞もまた内的であることから、その可能形である「笑える」や「泣ける」であれば自発を表し得る。尾張地方の方言で、腹が立つことを「怒（おこ）れる」という。「笑える」などからの類推によって成立していると考えられるが、今後の課題としたい。

参考文献

青木博史（1996）「可能動詞の成立について」 語文研究 81

植田瑞子（1998）「「自発」表現の一考察——自発文の二系列——」『日本語教育』96号
pp.109-20

- 小木曾智信（2002）「近代語テキストからの可能動詞の抽出——「太陽コーパス」を例に——」『明海日本語』7
- 尾上圭介（1998a）「文法を考える 5 出来文（1）」『日本語学』17 巻 1 号
- （1998b）「文法を考える 6 出来文（2）」『日本語学』17 巻 10 号
- （1999）「文法を考える 7 出来文（3）」『日本語学』18 巻 1 号
- 川村大（2012）『ラル形述語文の研究』くろしお出版
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——』ひつじ書房
- 渋谷勝己（1993）「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33-1
- （2005）「日本語可能形式にみる文法化の諸相」『日本語の研究』1-3
- 高橋芽衣子（2012）「自発・受身の成立条件——思考動詞ラレル文ル形のテンス的意味に注目して——」『Nagoya Linguistics（名古屋言語研究）』6 pp.55-65 名古屋言語研究会
- 日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法 6』くろしお出版
- 森山卓郎（1988）『日本語動詞述語文の記述的研究』明治書院

用例出典

朝日新聞オンライン記事データベース 聞蔵Ⅱビジュアル

附記 本章は、平成 26 年度博士課程（後期課程）単位認定論文に加筆・修正をしたものである。

第5章

可能動詞「泣ける」による自発表現 ——太陽コーパスにおける「泣く」の観察から——

1. はじめに

現代語の可能動詞の一部は、自発のような意味を表す。

- (1) a. 泣きたいときに泣けるなんて、うらやましい。
b. (悲しい話を聞いて) 泣ける。

(1a) は可能、(1b) は自発に解釈される可能動詞である。「泣ける」の他に「笑える」という可能動詞も自発に解釈できるが、こういった可能動詞が自発にも解釈される要因について、可能動詞「泣ける」が発生した時期における動詞「泣く」の様相から、考察する。

2. 『太陽コーパス』における「泣く」の分析

『太陽コーパス』における可能動詞「泣ける」の初出は、1917 年である（小木曾智信 2002）。

- (2) 私は耐まらなく悲しくなつて、四邊に人影がないのを幸ひに泣ける¹だけ泣きました。(1917 年 8 号「母なき子」長田幹彦 P239A02)

同年に (2) を含む 3 例、1925 年に 2 例見られる。以下に全例を挙げる。

- (3) 『私も今の心持では、どんな悲みにも堪え得ると思ひます。もう滅多な事には泣きません。泣けなくなつてゐます。……この後、よしどんな大事件に打突からうとも。』(1917 年 9 号「みじか夜」中村星湖 P238A09)

(4) もう一度読み返した時、勇吉は初めて泣ける自身を持った。(1917年10号「感謝」久米正雄 P269A10)

(5) 夜床の中にはひつてから、ひとりで泣けて泣けて、仕方がなかった。(1925年9号「針の片」三宅やす子 P185A21)

(3)～(5)の「泣ける」はすべて、特定の動作主の「泣く」動作の実現を表している。可能動詞「泣ける」が、他の可能動詞が表さない自発の意味を表すようになったのはなぜか。可能動詞「泣ける」が成立し、使用されるようになった時期に、可能動詞「泣ける」あるいは動詞「泣く」に何等かの変化が生じ、それにより、可能動詞が自発を表すようになったのではないかと考え、当該時期の日本語の通時的な変化を探ることができる『太陽コーパス』を用いて考察する。

考察は、『太陽コーパス』中、動詞「泣く」全450例を対象とする。可能動詞「泣ける」の自発用法との関連を探るのが目的であるから、「(虫が)鳴く」と同義であると判断されるものは含まない。また、副詞的に用いられる「泣く泣く」、名詞的に用いられる連用形「泣き²⁾」、「泣かせ³⁾」、連用形で名詞に係るもの⁴⁾を除く。「泣く」を要素として含む複合動詞も対象から外す。

以下、動詞「泣く」の人称、「泣く」動きの実現性、「泣く」人物の性質、という三つの観点から考察する。

2.1 人称

まずは、『太陽コーパス』中に出現する動詞「泣く」の人称を確認する。動詞「泣く」は

¹ 以下、用例中の下線は全て引用者による。

² 次のようなものを指す。

・私達の藩主も、維新廢城の後、泣きの涙で、この河岸を江戸へと立つて行つたのであつた。(1917年4号「利根川ペリのある町」田山花袋 P160A04)

・立ちかゝる娘の袖に縋りついて、口惜泣きに泣き沈むお房。(1895年7号「子煩悩」大橋乙羽 P114A19)

³ 次のようなものを指す。

大名泣せの唯一の手段さ！(1901年13号「維新の軍事探偵」伊集院兼常(談) P120B19)

⁴ 次のようなものを指す。

「それは出来ません、何うも出来ません」と泣き聲になるです、(1901年13号「再婚」上村左川(訳)；コナン、 Doyle(作) P101A17)

なお、後接する名詞には、「声」「言」「寝入り」「顔」「笑」等が見られた。

動作動詞に分類され、感情を表出する動詞や形容詞などと異なり、人称に言及されることはない。一方、自発となる内的な思考動詞には、人称制限が見られるケースがある（工藤真由美 1995）。また、自発は通常、一人称主体をとることが指摘されている（森山卓郎 1998）。人称に関して、動作動詞「泣く」と、自発を表す内的な動詞の可能形「泣ける」は対照的であるといえる。ここでは、動詞「泣く」における人称の実態から、可能動詞「泣ける」が自発用法を獲得したのは、動詞の性質が変化した結果であるという可能性について検討する。なお、考察の対象とする用例は会話文に絞る。会話文であれば、自発は一人称をとるのが一般的だが、小説の地の文などの〈かたり〉のテキスト⁵においては、自発も人称制限から解放されると考えられるからである。

2.1.1 「泣く」の人称の様相

まずは、動詞「泣く」の人称の様相を概観する。対象とする「泣く」は 102 例見られた。括弧内は、その年の全用例における割合⁶である。

	一人称	二人称	三人称	不定「誰」	計
1985 年	9 (25.7%)	17 (48.6%)	6 (17.1%)	3 (8.6%)	35
1901 年	0 (0%)	2 (40%)	3 (60%)	0 (0%)	5
1909 年	11 (42.3%)	4 (15.4%)	11 (42.3%)	0 (0%)	26
1917 年	14 (53.8%)	6 (23.1%)	5 (19.2%)	1 (3.8%)	26
1925 年	0 (0%)	8 (80%)	2 (20%)	0 (0%)	10

表① 年次別「泣く」主語の人称

なお、この表における二人称の「泣く」には、次のようなものも含まれている。

- (6) 静緒 情ないわ。
 松枝 情無からう。
 静緒 悲しいわ。

⁵ 用語は工藤（1995）による。

⁶ 少数第二位を四捨五入したため、合計が 100%にならないこともある。

松枝 悲しからう。

静緒 涙が出る……

松枝 泣きや、泣きや。(1909 年 1 号「三七信孝」山崎紫紅 P330A24)

(7) 「オ、誰がよオ、誰よ、宵から早く寐かせたので、目々がさめたのかオ、よし～
～、乳も否なは澤山なか、よし～～泣くな、脊負してやりませうソレ～～能いか、
坊やのお守は何所へ行た、」(1895 年 1 号「従軍人夫」饗庭篁村 P093A09)

(8) それが先生の耳に通じたのか、先生は弱い聲音で、『最う泣いても可いんだよ』
と言はれた相である。(1917 年 1 号「漱石先生と門下」森田草平 P135A17)

(9) 町の門へ来ると一青年が道端に座つて居て、泣いて居るのを發見して、耶穌は
其青年の髪の毛に手を觸れて「何故に泣くのだ」と聞いた、(1909 年 8 号「ラ
スカー、ワイルドの一面」野口米次郎(翻訳)；アンデルユ、ジツド P120B16)

(6) の命令、(7) の禁止、(8) の許可は、聞き手の行為に関するものであるから、二人
称をとる。(9) の疑問も、「泣く」主体は聞き手である二人称となる。また、一人称・三
人称にも、次のような希望や意志を表すものが含まれている。

(10) もう泣きたくても聲は立たず、涙もあまり出ませんでした。(1917 年 9 号「み
じか夜」中村星湖 P236A19)

(11) 笑ひたいからと言つて笑ひ、泣きたいからと言つて泣くのは人の生血を吮つて
自分の肉を肥やす資本主めらのするこつです、(1909 年 4 号「銅山王」佐野天
声 P106B15)

(12) 坊は強いよ、鐵砲玉なんぞが中ツたツて泣やアしない、泣もんか、いつか御門
の處で轉んで鼻血が出たツて泣やアしなかつたもの。(1895 年 3 号「吾妻錦絵」
須藤南翠 P063A06)

こういったものを対象から外し、誰か特定の人物の「泣く」動きを述べていると判断でき
る(13)～(15)のようなものに絞ると、次の表②ようになる。動詞「泣く」の主語の人
称に、通時的な変化や特段の分布の偏りは見られない。

(13) 私も一緒に泣いてしまひましたがね、

(1917 年 9 号「みじか夜」中村星湖 P234A02)

(14) 『御新さん、御尤もですけれど、泣いて入しつては、殿様の菩提の爲にもなりません。(1925 年 3 号「歴史情話 息のぬぐみ『第二回』」前田曙山 P172A02)

(15) 暫くすると奥様とやら云た老婦が自分で出て来て眼を眞赤にして泣ながら、阿兼はどうして居やるかと種々な事を私に尋ねてネ、(1895 年 9 号「夜の鶴(下)」福地桜痴 P099A24)

	一人称	二人称	三人称	不定「誰」	計
1985 年	8 (44.4%)	1 (5.6%)	6 (33.3%)	3 (16.7%)	18
1901 年	0 (0%)	0 (0%)	3 (100%)	0 (0%)	3
1909 年	9 (47.4%)	0 (0%)	10 (52.6%)	0 (0%)	19
1917 年	10 (55.6%)	2 (11.1%)	5 (27.8%)	1 (5.6%)	18
1925 年	0 (0%)	3 (60%)	2 (40%)	0 (0%)	5

表② 年次別「泣く」主語の人称

2.1.2 人称から見る動詞「泣く」の性質

ここでは、人称に関連した動詞の性質について述べる。工藤（1995）によると、動作動詞とは異なり、全ての内的情態動詞のスル（シタ）形は、基本的に一人称に限定され、態度表明や感情表出、体験的確認・記述を表す⁷という。逆に述べるならば、会話文におけるスル（シタ）形で人称制限が見られないのであれば、それは内的情態動詞ではないといえる。なお、内的情態動詞に分類される「思う」「考える」等は、ラレル接辞を伴って自発文になり得るものである。

会話の主文末で、シタ形をとっている 3 例を以下に挙げる。スル形をとるものは見られなかった。

⁷ 例外として、〈はなしあい〉のテキストにおける〈未来〉を表す場合、〈かたり〉のテキストの場合、〈解説〉のテキストの場合について述べている（工藤 1995）

- (16) 異な事を御聞申て吾儕までが泣きました(1895 年 6 号「涙の媒介」条野採菊 P123A04)
- (17) 「僕は何度あの空地川の岸邊を讀んだでせう。十幾回と云ふんでせう。その度に必ず泣きました。私ばかりぢやありません、友達どもゝ多く泣きました。」(1909 年 14 号「一室内」真山青果 P103A02)

(16) は一人称のシタ形である。(17) にも、一人称のシタ形は見られるが、「友達ども」という三人称をとるシタ形も現れている。

内的情態動詞であれば、シタ形は一人称に限られるが、(17) は三人称主語を取っている。動詞「泣く」は、内的情態動詞ではなく動作動詞であるからである。

会話文において動詞「泣く」がスル(シタ)形を取る例がごく少数であり、通時的な分析には至らなかったが、「泣く」はあくまで動作動詞であり、内的情態動詞ではない。自発文によく見られる思考動詞「思う」や「考える」は内的情態動詞であり、(ラ)レル接辞が後接して、動作主の非意志的な動き、すなわち自発を表す。しかし、そのラレル形自発の様に、動詞「泣く」のアスペク的な性質により可能形が自発用法を獲得した、というわけではないようである。

2.2 時間的限定性

2.2.1 動詞「泣く」スル形の用法の様相

ここでは、先ほどと同様に主文末のスル形に注目するが、人称ではなく、スル形によってどの時間軸に位置付けられるかという観点から、動詞「泣く」の性質を探る。対象とするのは、『太陽コーパス』中、主文末に見られる動詞「泣く」である。「泣く」の後に句点ではなく読点が付されているものもあるが、文脈上、主文であると判断できれば考察の対象とした⁸。

動詞「泣く」は時間的展開性のある動作動詞であるからスル形は未来を表すが、テキストの性質上、単に動きの概念を表すだけであって、テンス的意味を表さないものもあると

⁸ シタ形だが、次のようなものである。

彼は弱りたる手を以て十字架を取り、其を唇に押當てさめ〜と泣た、(1901 年 14 号「セバストウポルの落城」嵯峨の屋おむろ(訳); トルストイ(作) P112A08)

いう（日本語記述文法研究会 2007）。まずは、脚本のト書きに見られるものである。

(18) はな子。(鑑三の出てゆくのを待つて、感傷的に) 姉さん。ゆるして下さい。

どうかゆるして下さい。(まさ子の手にしがみつく。)

まさ子。(強ひて平静を装つて) はな子さん。何です。ゆるすもゆるさないも

ないぢやありませんか。(終に泣聲になる。)

はな子。(泣く。) ……………。

(1917 年 1 号「戯曲 生きんとすれば一二幕一」長田秀雄 P319A11)

ト書きに見られるスル形は、「ただ動きの概念を示し、文を並べた順に事態が進行するということだけを表すものである。形態としては非過去形であるが、テンス的な意味はない (p.123)」とする。また、日記のように、起こった順に出来事を記述するタイプの文章においても、概念のみを表し、テンスの意味は表さないという。

(19) 佛國民は貴賤職業の差別なく誰も彼も鐵砲擔いで、血火の渦卷く戰地へ行、國會議員にて戰場の露と消えしは十七名、其議員達の今は空なる座席には十七の数の美しい花環は置供へらると、偕も優しくも床しきは佛國の習俗、愛國の情、悲壯の氣あふるゝ廣き議場内十七議員を記念の哀しき色の花束よ、窓より覗く蒼空は嘆き、風は吹く弔ひの歌。我は其花環を紅い幻に浮べて泣く。(1917 年 1 号「仏蘭西國民に寄す」児玉花外 P163A18)

「花環」が「置供へら」れる、という動きが起こり、その後「我」の「泣く」という動きが記述されているといえる。「それが起こった順に事態を記述していくことに書き手の関心があり、(中略) 事態をリストアップしていくような感覚で非過去形が用いられているのである。(p.124)」という。これらの現象は、テキストの性質に起因するものであるとされている。

その一方で、テンス的な意味を表すスル形が、特定の時間軸に位置付けられないことがある。

(20) 婦人の方は齋場から歸つて呉れと頼んだのだが、例の叔母さんと、病院へ花を

持つて来たお針の師匠のお八重さんと云ふのが、如何しても送つて行くと言ひ張つて、男達と一緒に隨いて来た。そして、道すがらお町の生前の事を言ひ出して、『斯うして念が達いて思ふお方と一緒に成つたからは、あゝもしたい斯うもせうと、私に會ふたんに末の末の事迄話してやつたが、死ぬ迄左様思つてやつたらうな』と、お八重さんは泣く。私は身に沁みてそんな話を聞きながら、背後から隨いて行つた。(1917年1号「反魂香」森田草平 P275A17)

(20) は小説における例である。「頼んだ」「言い張る」「隨いて来た」「言ひ出す」に続いて、「泣く」という動きを述べている。このような、小説の地の文においてシタ形と共に用いられるスル形について、鈴木重幸(1972)の記述を受け、高橋太郎(2003)は「歴史的現在(p.183)」として、眼前でその状況が展開しているという感覚を読者に与える効果があると述べる。

特定の時間軸上に位置付けられないスル形として、次のようなものもある。

(21) 太郎はよく酒を飲む。

(22) 赤ん坊はよく泣く。

(21) は、「太郎」という人物にとっての習慣、(22) は「赤ん坊」という主体における性質を述べるものである。(21) が恒常的であるとは言い難いが、このような習慣・恒常的な性質を表す場合は、スル形が用いられる。動作を表す「泣く」とは異なり、時間的限定性はない。(23) は、文語体ではあるが『太陽コーパス』中に見られた例である。

(23) 美は善に反するを妨げずとの恐るべき妄念は、小説家を名として敗徳を働らく文界の墮落者を生ずるに至りしも、我文壇は尋常の事として寛容せりき、彼等(=日本文学者)は能く泣く、失戀の人に泣き、薄命の人に泣き、盜賊に泣き、不義者に泣き、自殺者に泣く、彼等に對して一滴の涙は以て滔天の罪を雪ぎ得べし、(1895年9号「文学」*⁹ P048B19、P048B20、括弧内引用者)

特定の時間軸に位置付けられる「泣く」という出来事ではなく、「日本文学者」が、しばし

ば「泣く」という動作を行うものであるという、習慣あるいは性質といえるようなものを述べている。

特定の時間軸に位置付けられないスル形が、(20) のような歴史的現在、(23) のような主体の習慣や性質以外を表すこともあるが、考察の対象とした範囲においては、歴史的現在、習慣・性質を表すものしか見られなかった。様相を、以下にまとめる。

	歴史的現在	習慣・性質	計
1895 年	3	3	6
1901 年	1	0	1
1909 年	0	0	0
1917 年	1	0	1
1925 年	0	0	0

表③ 年次別「泣く」スル形の用法

2.2.2 属性叙述述語としての「泣く」

主文末でスル形をとる「泣く」はほとんどみられなかったが、表③中、習慣・性質を表す 1985 年の 3 例に注目したい。(22) の 2 例に加え、(23) が該当する。

(24) 蓋し世は變則に成り人は顛狂を貴び政治は遊戲的に造られ宗教は淫猥的に動けるものに似たり、達觀すれば社會の現象は一として奇觀ならざるはなし、唯夫れ奇觀ならざるものなきが故に俗人は觀て以て常態として怪まざるなり、功なくして大賞を得、罪なくして嚴罰を受く故に佞人時に得意の堂に誇り忠臣或は失望の野に泣く、(1985 年 12 号「閑窓瑣言」 帰峯生 P180A12)

正しいとはいえない世の中において、「忠臣」は「泣く」、ということを述べているので、ある条件下における、ある「忠臣」の性質を表現したものであろう。

主体の習慣・性質を表している 3 例は、益岡隆志（1987、2000、2004、2008）が述べ

⁹ 無署名の記事であることを表す。

る、属性叙述であるといえる。益岡（1987 他）は、出来事を叙述する事象叙述と、対象の属性を叙述する属性叙述とを区別する。叙述する属性は、内在的属性と非内在的属性とに区別され、習慣・性質を表す「泣く」は、内在的属性の中の単純所有属性である（益岡 2008）。

(25) あの人はよく泣く。

⇒あの人はよく泣くことがある。

（益岡 2008 p.8）

対象「あの人」が、「よく泣く」という習慣的な出来事を所有していると考えるのである。

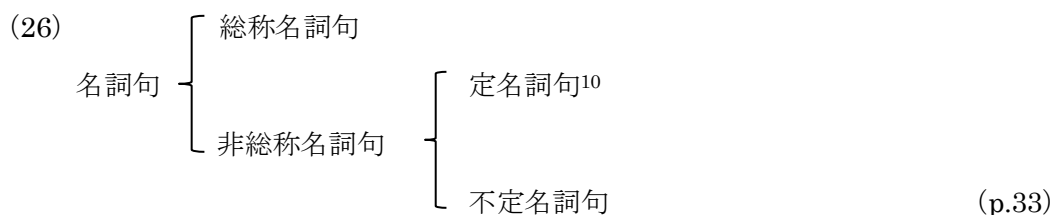
「泣く」という動作動詞は事象叙述をするのが一般的だが、属性叙述文にもなる。

主体の習慣・性質を表す 3 例以外の、歴史的現在を表す「泣く」スル形は、過去形と共に用いられることから、特定の時間軸上に位置付けることはできないが、小説において、「泣く」という出来事が起こったことを述べる、つまり、事象を叙述する文である。これもまたごく少数の用例からの指摘にすぎないが、属性叙述が 1895 年に 3 例見られるのみであるのに対し、事象叙述は、1895 年、1901 年、1917 年にわたって見られる。

2.3 主体の性質

2.1 では、会話文中に出現する「泣く」について、その主体の人称を見たが、ここでは、人称ではなく、主体として特定の存在を指しているか否かという点に注目する。

名詞句が何を指しているのか、という、名詞句の定性について、村田真樹・黒橋禎夫・長尾真（1996）に従って分類する。村田・黒橋・長尾（1996）は、英語の名詞句を念頭に置いた分類であるとしながらも、日本語の分析にも役立つとして、以下のようにまとめる。



¹⁰ 堀口和吉（1995）、丹羽哲也（2005）による名詞句の定性の分類において、指示対象の範囲が定まった名詞句、すなわち定名詞句には総称名詞句が含まれている。

総称名詞句と非総称名詞句との区別を、「その名詞句の類の成員すべてが類自体を指示対象とする (p.33)」か「類の成員の一部を指示対象とする (p.33)」か、で区別する。その上で、定名詞句を「その名詞句が意味する類に属する文脈上唯一の成員（単数でも複数でも不可算のものでもよい）を指示する (p.33)」、不定名詞句を「その名詞句が意味する類に属するある不特定の成員（単数でも複数でも不可算のものでもよい）を指示する (p.34)」と定義し、各名詞句の例を挙げる。

- (27) a. 総称名詞句 犬は役に立つ動物です。
 b. 定名詞句 その犬は役に立ちます。
 c. 不定名詞句 犬が三匹います。 (pp.33-4)

(27a) は、「犬」全般が「役に立つ動物」であることを述べる。(27b) は、指示詞「その」により、特定の「犬」を指していることが分かる。(27c) の「犬」は、総称名詞「犬」の成員のうち、どの三匹でもなり得ることから、不定名詞である。

2.3.1 動詞「泣く」主体の性質の様相

『太陽コーパス』中の動詞「泣く」の主語として、何等かの名詞句が必ずしも現れているわけではない。また、小説の場合、「泣く」の主語となる人物を、固有名詞で表現することが多い。従って、名詞句の指示性という観点から述べることはできない。だが、村田・黒橋・長尾（1996）が述べる定名詞句の、「その名詞句が意味する類に属する文脈上唯一の成員（単数でも複数でも不可算のものでもよい）を指示する (p.33、下線引用者)」という点に注目したい。動詞「泣く」という動きを行う人物として、定名詞句で表すことができるような、特定の人物が想定されるか否かを見ていく。

- (28) その泣き聲を聞いた時、アクスヨノフも諸共に泣いた、(1909 年 1 号「流刑者」
 斎藤野の人（訳）；トルストイ（作） P096A14)

- (29) 色々な事があつた十二年の後、二十で綾子は柳伯爵と結婚した。その数日前彼女は両親に連れられて内へ暇乞に來た。兄弟達は皆んな座敷へ呼び出されたが、自分は二階に隠れてゐて遂に出て行かなかつた。近く嫁入する人を乗せた馬車

が門を出て行く時、窃かに二階の窓から別を告げて泣いた。(1917年4号「イエッタトリイチエ」有島生馬 P393A17)

(28) では「泣く」の動作主「アクスヨノフ」が明示されている。(29) では、固有名詞こそないものの、特定の人物が「泣く」という動作を行っていることが、文脈から分かる。次の(30)「泣く」の動作主「大きな人達」は、定名詞句である。

(30) いつか私達親子で歌舞伎座を見に行つたことがあつた。其時、大きな人達は泣いたり笑つたりして見て居たが、八歳になる私の子供は、一向面白くもない顔をして、是よりも活動寫眞の方が面白いと言つた。(1909年1号「文芸取締問題と芸術院」小杉天外(談) P136B07)

一般に「大きな人」と表現される類の成員はさまざまに考えられるが、その「大きな人達」全員を指すわけではない。また、不特定の「大きな人」ではなく、親子で見に行つた歌舞伎座に居合わせた、という、文脈上特定される「大きな人」達を指す。

(31) 足を踏まれて泣く子あれば叱り付けられて驚く母あり。(1895年5号「汽車旅行」大和田建樹 P066A18)

(32) 然し今日の露國に斯様な詮義立は無用である、萬事は政府の都合である、政府のする事は何でも好いとされて、結局泣く子と地頭には勝たれない。(1925年4号「赤露印象記」増田正雄 P016A08)

(31)(32) は、いずれも「泣く」動作主が「子」である。(31) の「子」は、汽車に乗っている人々の中で、足を踏まれて泣いてしまった「子」がいることを描写している。文脈上、「子」という類における特定の成員を指している。一方(32) の「子」は、慣用句であることから、泣いている特定の「子」ではなく、不定名詞としての「子」であると判断できる。

(33) 思へば變つたものであるが、この村の變つたほどに、世の中は進んでゐない。世の中は進んだかも知れぬが、人の心が内から開けて來ない。昔しのまゝの心

で人々は居るやうな気がする。世の先覺者とかパイオニアとか言はるゝものは、時々交代して、何か言つたり、書いたりしてはゐるやうであるが、時代の眞相を了解して、生活の眞意義を攫み取らうとするやうなのは尠い。詰まらぬことで泣いたり笑つたり、怖れたり怒つたり喜んだりしてゐる。(1917 年 13 号「暴風雨の夜」上司小剣 P210A14)

(33) では、「泣く」主体は明示されていないが、文脈から「人」と考えられる。しかしながら、特定の誰かを指してはいない。名詞句としては現れていないが、総称的なものとして把握できる。

年次別の「泣く」主体の様相を以下にまとめる。総称的主体と不特定の主体とには、特定の誰かではないという性質が共通し、文脈上特定できる定的主体とは異なるため、主体が特定不可のものとして表示する。

	特定可 (定的主体)	特定不可 (不特定の主体+総称的主体)	不定「誰」	計
1895 年	109 (81.3%)	22 (16.4%)	3 (2.2%)	134
1901 年	41 (82%)	9 (18%)	0 (0%)	50
1909 年	69 (83.1%)	14 (16.9%)	0 (0%)	83
1917 年	122 (94.6%)	7 (5.4%)	0 (0%)	129
1925 年	52 (96.3%)	2 (3.7%)	0 (0%)	54

表④ 年次別「泣く」主体の性質

文脈上、その者であると特定できる主体の「泣く」という動作を述べる割合が高まり、誰とは特定し難い主体の「泣く」という動作を述べる割合が低下している。

2.3.2 文章ジャンルとの関係

本節では、文章ジャンルという観点に注目して分析する。『太陽コーパス』では、その記

事の内容を、「日本十進法分類」(NDC¹¹)で分類している。2.3.1 で見た主体についてジャンル別の出現状況を見てみると、徐々に使用割合が高まっている特定可能な定的主体は、特定不可能な主体と比べ、文学作品において多く見られるという特徴がある。NDC の番号が9から始まる類に関しては、901 から 908 が総記、909 が児童文学研究、910 から 990 が各言語の文学を表すとされている。文学作品をジャンルとして取り立てるため、表においても区別し、「91_~99_」で示してある。

		0	1	2	3	4	5	6	7	8	90_	91_~99_	計
1895 年	特定可	2	3	3	8	0	0	1	5	0	5	82(75.2%)	109
	特定不可	1	3	0	3	0	0	0	3	1	10	1 (4.5%)	22
1901 年	特定可	0	1	5	4	0	0	0	0	0	4	27(65.9%)	41
	特定不可	0	0	0	6	0	0	0	0	0	3	0 (0%)	9
1909 年	特定可	1	0	1	5	0	0	0	1	0	9	52(75.4%)	69
	特定不可	0	0	0	5	0	0	0	0	0	3	6(42.9%)	14
1917 年	特定可	2	0	1	5	0	1	0	1	0	0	112(91.8%)	122
	特定不可	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	5(71.4%)	7
1925 年	特定可	1	1	2	8	0	13	0	0	0	0	27(51.9%)	52
	特定不可	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0 (0%)	2

表⑤ 年次別動詞「泣く」主体の出現ジャンル

各年次に見られる特定可能な主体のうち、各言語の文学作品に出現する主体はかなりの割合をしめる。特定不可能な主体が文学作品に用いられる割合と比べると、高いといえる。また、特定不可能な主体が文学作品に全く見られない年があるのと対照的である。なお、『太陽コーパス』の年次別ジャンルの傾向としては、「3 社会科学」の記事が全体の 23~47% を、「9 文学」の記事は 16~22%を占め、その他ジャンルは、「0 総記」が例外的に 20%前後となっている年もあるが、おおむね 10%未満程度であることが確認されている（田中牧

¹¹ 図書館での資料の分類に用いられており、アラビア数字で表される。NDC の類の区分は以下の通りである。

0…総記、1…哲学、2…歴史、3…社会科学、4…自然科学、5…技術、6…産業、7…芸術、8…言語、9…文学（日本図書館協会分類委員会編 2014）

郎 2005)。

表⑤を見ると、動詞「泣く」の出現は、そもそも各言語の文学作品に偏っているようである。その中でも、主体が特定可能な「泣く」が多く見られることを指摘しておく。

3. 八亀裕美（2007 他）による形容詞の分類

「泣く」という動作を行う際には、多くの場合、何等かの感情が伴っているはずである。感情を表す際に一般的に用いられる形容詞について、八亀裕美（2007、2008、2009）の記述を見る。

八亀（2007 他）は、名詞・形容詞・動詞を、時間的限定性という観点から連続性のあるものとして捉える。そして、時間的限定性の有無から、形容詞を「状態形容詞」と「特性形容詞」に分類する。それぞれについて、性質や違いを詳細に記述している。以下は、それぞれの形容詞述語文の概略である。

(34) 〈特性〉

- ・「このテーブルは大きい」
- ・時間的限定性はない。
- ・基本的に〈特性形容詞〉が述語になる。
- ・属性のもちぬしは基本的に「～は」で示される。
- ・属性のもちぬしは基本的に、人・もしくはものなど具体的である。

（八亀 2007 p.68-9 一部抜粋）

(35) 〈状態〉

- ・「すぐに来てくれてうれしい」「今日の田中の態度はおかしい」
- ・時間的限定性がある。
- ・基本的に〈状態形容詞〉が述語になる。
- ・状態形容詞の大半は、いわゆる「感情・感覚形容詞」である（「すきな」などは除く）。
- ・文構造が未分化な一語文で現れることも多い。
- ・評価の客体は出来事であることが多い。

（八亀 2007 pp.69 一部抜粋）

特性形容詞と状態形容詞は時間的展開の有無という違いがあるが、その他の特徴として、話し手の主体的な関わり方と、評価の客体の性質を挙げる（八亀 2008）。

(36) a. この部屋は大きい。

b. このまま帰ってしまうなんて、もったいないよ。 (八亀 2008 p.35)

「大きい」「もったいない」という評価を下すのは話し手である。しかし、特性形容詞文 (36a) は、「大きい」という評価を、ある基準に基づいた比較を通じて下し、「この部屋」というものを意味づける。一方 (36b) の「もったいない」という評価は、感情をもとにして下されており、「このまま帰ってしまう」という、感情を引き起こす原因を「もったいない」と意味づける。特性形容詞は、話し手の評価的な関わり方は背景化されているが、状態形容詞文 (36b) は、話し手の評価的な関わり方が全面化しているという。評価の客体の性質については、次のように説明される。

(37) 太郎はやさしい。(八亀 2008 p.37)

特性形容詞文 (37) で意味づけられるもの、つまり、属性のもちぬしである「太郎」は、具体的な人物である。

(38) 会えてうれしい。

一方、状態形容詞文 (38) で意味づけられるもの、つまり評価の客体は、「うれしい」という感情を引き起こす原因である。それは「会えたこと」であるから、出来事である。八亀 (2008) では、評価の客体の性質が、特性形容詞では人物・事物であり、状態形容詞では出来事であることが多いとされる。また、評価の客体のそのような性質は、時間的限定性という言葉でも表現されており、人物・事物であれば、相対的に恒常的だが、出来事であれば、一時的・一回的であるという。従って、特性形容詞は時間的限定性がないが、状態形容詞は時間的限定性があるということになる。

4. 可能動詞による自発と状態形容詞

4.1 可能動詞「泣ける」自発と状態形容詞との類似性

可能動詞「泣ける」による自発は、(39)のように、一人称主体を取るのが一般的である。

(39) (悲しい話を聞いて、私は) 泣ける。

また、「泣く」は動作動詞だが、可能動詞「泣ける」による自発は、「泣く」という動作を述べるというより、発話時点の感情の発露のようにも感じられる。一人称をとり、ル形で現在を指していることから、ここでは、八亀(2007 他)による状態形容詞との類似性を探る。

状態形容詞は、「すぐに来てくれてうれしい」のように、感情を表すものを含む。「うれしい」という評価を下すのは話し手であり、話し手の評価者としての関わりが前面に出るのが状態形容詞文の特徴である。状態形容詞文で表される事態は、誰にとってもそう述べられるという事態とは区別される。また、評価者が話し手であるということは、一人称を取ることになる。一語文で表されることが多いという指摘もあり(八亀 2007)、これは可能動詞による自発にもいえる。

(39) (悲しい話を聞いて、私は) 泣ける。(再掲)

(40) 悲しい話を聞いて／聞いたので、泣ける。

(39)のように「泣ける」とだけ発話される方が自然で、(40)のように「泣ける」と述べるに至った状況の説明がなされることはそれほど多くない。状態形容詞の評価の客体は出来事であることが多く、八亀(2008)によると、ガ格で表示されたり、条件節で表されたりするという。可能動詞による自発の場合も、表示するならば(40)のように「～テ」や「～ノデ」が選択されると考えられ、「泣ける」原因となる評価の客体は、出来事であるといえる。

4.2 『太陽コーパス』中の「泣く」に見られる諸特徴との関連

2. で、『太陽コーパス』に現れる動詞「泣く」を様々に分析したが、ここでは、その際に見られた諸特徴と、状態形容詞との関連について述べる。

4.2.1 事象叙述

動詞「泣く」のスル形に注目した際、習慣・性質を述べる文は 1895 年に 3 例見られ、歴史的現在を表す文は、1895 年、1901 年、1917 年にわたって 5 例見られた。

習慣・性質を述べる文は、属性叙述文である。歴史的現在を表すスル形は、小説において過去形と共に用いられており、特定の時間軸に位置付けられる通常の動作動詞スル形とは区別される。しかし、小説中に流れているある時間において、その動作がなされていることを述べているのは間違いないだろう。歴史的現在を表す文は、「泣く」という出来事を述べる事象叙述文である。

出来事であれば、それは一回的で、偶発的である。多くの動作動詞同様、動詞「泣く」も、一回的で偶発的な出来事を述べる性質を備えている。この「一回的・偶発的」という性質は、八亀（2008）による、状態形容詞文は時間的限定性があるという指摘と合致しており、「泣く」が可能動詞として用いられた際にも、その特徴が残る可能性がある。

なお、スル形に限定した場合、あまり数が見られない事象叙述ではあるが、小説においてシタ形やテイル形でしばしば用いられている。

4.2.2 「泣く」主体

動詞「泣く」の主体は、文脈上特定できる存在である割合が高まり、特定が難しい存在である割合が低下していた。

誰であるか特定可能な主体であれば、その人物の「泣く」という動作がイメージしやすいが、特定不可能な主体であれば、イメージすることも難しい。特定可能な主体の割合が高くなっていく変化は、動詞「泣く」で表す事柄として、「泣く」という動作そのものに重点が置かれるようになったからではないだろうか。そう考えると、動詞「泣く」は、積極的に「一回的・偶発的」な出来事を表すという性質を備えたということになる。

『太陽コーパス』中、スル形で属性叙述をするものは、主体の特定が難しいが、事象叙述をするものは、主体が特定可能である。

(23) 彼等 (=日本文学者) は能く泣く、失戀の人に泣き、薄命の人に泣き、盜賊に泣き、不義者に泣き、自殺者に泣く、彼等に對して一滴の涙は以て滔天の罪を雪ぎ得べし、(1895 年 9 号「文学」*P048B19、P048B20、括弧内引用者、一部省略して再掲)

(24) 功なくして大賞を得、罪なくして嚴罰を受く故に佞人時に得意の堂に誇り忠臣或は失望の野に泣く、(1985 年 12 号「閑窓瑣言」帰峯生 P180A12、一部省略して再掲)

(25) 『えー。急に此様になつて……。お神さん。』と、お村は顔に袖押當て泣く。
(1895 年 11 号「狂言娘」広津柳浪 P114B20)

(23) の主体は総称で、(24) は不定的であると判断できる。いずれも、性質を述べる属性叙述文である。事象を叙述する (25) の主体は「お村」という特定の人物であり、実際に「泣く」という出来事が描写されている。

4.2.3 評価の客体

次に、評価の客体についての傾向を述べる。評価の客体は、感情を表す状態形容詞では、感情を引き起こす原因であるといえる。「泣く」という動作を引き起こす原因・刺激となる事柄を見る。

(41) 丈夫な言葉の裏に籠つた母の涙、妻の危篤な状態も知らずに漂泊して居る父——寛三はそれを思つては獨聲を立て、泣いた。(1909 年 11 号「漂泊」相馬御風 P116B22)

(42) せめては其の叔母に、私は子供の昔に返つて、この苦しい胸の中を泣いて訴へようと思つた。(1917 年 12 号「なぜ母を呼ぶ」小川未明 P220A11)

(41) の主体は「寛三」という特定の人物で、「父のことを思う」という出来事が刺激

となって泣いている。(42) もまた、「私」という特定の人物が主体となり、文脈から「妻に出て行かれて苦しんでいる」という出来事が刺激となって泣いていることが分かる。次の(43)は、主体を唯一の存在として特定することはできないが、「出師の表を読む」という出来事が「泣く」刺激となっている。

(43) 又彼の出師の表の如きは、實に天下の名文と稱され、殊に日本に於て推重せられ、之を讀んで泣かざる者は人に非ずと云ふ位に我々の間に貴ばれて居るのであるが、今日の支那に行つて見ると斯かる立派なる精神は何處にあるかと、甚だ了解に苦しむのである。(1917年9号「最近支那政局の解剖」記者(文責); 日置益 P066A04)

その一方で、主体が特定できない「泣く」の場合、その刺激が出来事か否かが判然としないことが多い。

(44) 琴は本邦古來の名器にして、其韻鬼神を泣かしめ、夜叉をも涙を墮さしめき。
(1895年10号「新刊案内」*P051B03)

「鬼神」の全(総称)で、あるいは不特定の一部分が主体であると考えられるため、唯一の存在として主体を特定することができない。その「鬼神」が「泣く」刺激となっているのは、「琴」や「琴の音」といった事物か、あるいは「琴の音を聴くこと」といった出来事なのか、文脈からはどちらの解釈も可能である。

(44) のような例も存在することから、その数の多寡を述べることは困難だが、特定可能な主体を取る「泣く」の場合は、その原因・刺激が出来事となっていることが多いように感じられる。また、主体が特定できない場合には、(43) のように、そもそも「泣く」原因・刺激がはっきりしないものもしばしば見られる。

(45) 『そんな莫迦な理窟があつてたまるものか。女は嘘の皮で張つて泣く玩具だといふことに、己がうつかりしてゐたのだ。(1917年3号「打つ勿れ」中谷徳太郎 P204A10)

あくまで傾向の指摘にすぎないが、主体が特定可能な「泣く」では、その原因・刺激が出来事であることが多い。状態形容詞は、評価の客体の多くは出来事である。主体が特定可能な「泣く」文では、その人物の身に起こった特定の出来事が刺激となった「泣く」自体の発生を描写するのが自然ではないだろうか。主体が特定可能である割合が高くなっているということは、「泣く」という動きを引き起こす刺激が出来事である割合も高くなっていることが予想される。

4.3 可能動詞「泣ける」が自発を表すようになった背景

『太陽コーパス』中に、可能動詞「泣ける」は多く見られないが、「泣く」という動詞の様相から、可能動詞「泣ける」が自発を表すようになった背景について考察する。動詞「泣く」は小説に偏って見られる。それが、可能動詞「泣ける」の自発用法獲得の背景なのではないだろうか。

「泣く」の出現は小説に偏るが、小説に見られる「泣く」には特徴がある。誰が「泣く」のか、特定の主体を取りやすいという点である。これは、「泣く」がよく用いられる小説というジャンルの影響によるものだろう。小説という文章が登場人物の心情を描写するものである以上、特定の人物が「泣く」ことを描写するのは当然である。このとき描写される「泣く」は、動作としての「泣く」である。また、特定の主体の身に起こった出来事が「泣く」という事態発生の原因となっていることが多い。これもまた、登場人物の周りの出来事や、それによって動く心情を描写する小説というジャンル故であると考えられる。

小説における「泣く」が必ずしも一人称を取るわけではないから、動作動詞「泣く」と可能動詞「泣ける」による自発との結びつきがそれほど強いとはいえないかもしれない。だが、同じ三人称であっても、特定可能な主体か否かという違いは、可能動詞「泣ける」による自発文の成立に影響がないわけではない。

- (46) a. 泣けてきた。
- b. 太郎に別れを切り出され、花子は泣けてきた。
- c. 人々は泣けてきた。

(46a) の「泣けてきた」を自然な自発文として解釈するならば、主体は一人称を取ると

考えられる。(46b)は小説の地の文を想定してあるため人称制限はなく、三人称主語である。この「泣く」という動きの主体「花子」は、文脈上特定される主体である。同じく三人称主語を取る(46c)だが、自然な自発文として解釈しようとする、「人々」がどのような人物か具体的にイメージされてしまい、総称あるいは不特定の「人」を主体として読むことが難しい。誰であるか特定できない人物の「泣く」という動きが、可能動詞「泣ける」の形で自発を表すことは考えにくいため、人称程ではないが、主体が特定可能であるということは、動詞「泣く」と可能動詞「泣ける」による自発とを関連付けて把握する上で重要である。

動詞「泣く」は小説で多く用いられ、出来事が刺激となった特定の主体の動作を積極的に表すようになった。可能動詞「泣ける」による自発を状態形容詞的であると捉えた結果、小説に偏って出現することが背景となって、可能動詞が自発に解釈されるようになったと考えられる。『太陽コーパス』中の「泣く」に見られる、特定の人物の身に起こった出来事が原因となって発生した事態「泣く」を描写する、という機能は、「泣く」が可能動詞「泣ける」として使用される際にも保持され、その結果、評価の客体が出来事であり、話し手の評価的な関わりが前面に現れるという状態形容詞に近い、自発の意味を表すようになった可能性がある。

5. 可能動詞としての「泣ける」と特性形容詞

可能動詞「泣ける」による自発が状態形容詞であるとするならば、可能を表す可能動詞「泣ける」はどのように理解することができるだろうか。

(1) a. 泣きたいときに泣けるなんて、うらやましい。(再掲)

(1a)の可能動詞「泣ける」は、単純に、その動作が可能であることを表す。しかし、このように純粋な可能を表すものだけでなく、(47)のような可能動詞文も見られる。

(47) A : お薦めの映画はありますか。

B : 「〇〇」という映画は泣けるよ。

(39) (悲しい話を聞いて、私は) 泣ける。(再掲)

(47) の B の発話は、自発の解釈もできそうだが、(39) の自発が可能に解釈しにくいのと比べると、より積極的に可能を表しているといえる。可能動詞「泣ける」は、一語文では現れにくく、「泣ける」という対象がハで取り上げられる。取り上げられる対象は「映画」のような具体物である。(1a) とは異なり、(47) B の発話に見られるこれらの点は、特性形容詞の特徴と共通する。

八亀(2008)によると、特性形容詞と状態形容詞ははっきりと区別されるものではなく、状態形容詞について、「評価の客体の一般化が進むと、ポテンシャル化が進み、〈特性〉的になる(p.94)」と述べる。(47) の B の発話を、「『〇〇』という映画を観た」という出来事が刺激となって生じた B の感情を述べたもの、と理解すると自発の解釈も成り立つ。その一方で、評価の客体を「『〇〇』という映画を観た」という、B の身の上に起こった一回的な出来事ではなく、「『〇〇』という映画」のように、一般的な事物として捉えると、特性形容詞文に近付き、「『〇〇』という映画」の性質を述べる文になる。その場合は、話し手 B の感情を述べているのではなく、B に限らず誰にとっても「泣く」という事態を発生させる事物として「『〇〇』という映画」を意味づけている。

6. まとめと今後の課題

可能動詞が自発に解釈される背景について、『太陽コーパス』における動詞「泣く」の様相から考察した。動詞「泣く」の出現が小説に偏ること、小説においては特定の人物の身に起こった出来事が原因となった「泣く」という動きを表すことが多いことを指摘し、それ故に、可能動詞「泣ける」が状態形容詞のように感情を表すようになったと結論付けた。

本来「泣く」は動作動詞であり、感情まで表現する動きではないが、「泣く」に至るには何等かの感情の動きがあるはずである。全ての可能動詞が「泣ける」のように自発に解釈されないのは、動詞に感情が伴うか否かという違いによるものであろう。「泣ける」だけでなく「笑える」もまた自発に解釈される可能動詞である。「泣く」同様、感情の動きを伴う動詞であると考えられる。

『太陽コーパス』中の用例の分析で、「泣く」という動きを引き起こす原因・刺激について、明確に分類することができなかった。「泣く」に至った原因が、一回的な出来事であるか、事物であるかという違いは大きく、出来事であるならば状態形容詞に近いといえるの

で、確かな基準を設け、再度分析する必要がある。

また、可能に解釈される可能動詞にも、典型的な事態の実現を表すものと、自発に近く、評価的な可能を表すものがあることが明らかになった。これらの詳細な記述を通して、より発展的に分析できる可能性がある。

参考文献

- 小木曾智信（2002）「近代語テキストからの可能動詞の抽出——「太陽コーパス」を例に」
『明海日本語』 7 pp.125-135
- 金水敏（1986）「連体修飾成分の機能」『松村明教授古希記念国語研究論文集』 pp.602-24、
明治書院
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——』 ひつじ書房
- 鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』 むぎ書房
- 田中牧郎（2005）「言語資料としての雑誌『太陽』の考察と『太陽コーパス』の設計」、国立国語研究所編『雑誌『太陽』による確立期現代語の研究——『太陽コーパス』研究論文集——』 博文館新社 国立国語研究所報告 122、 pp.1-48
- 高橋太郎（2003）『動詞九章』 ひつじ書房
- 西尾寅弥（1972）『形容詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版、国立国語研究所報告 44
- 西山佑司（2003）『日本語の名詞句の意味論と語用論——指示的名詞句と非指示的名詞句——』 ひつじ書房
- 日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法 4』 くろしお出版
———（2007）『現代日本語文法 3』 くろしお出版
- 日本図書館協会分類委員会編（2014）『日本十進分類法 新訂 10 版』 社団法人日本図書館協会
- 丹羽哲也（2004）「名詞句の定・不定と『存否の題目語』」『国語学』 55-2 pp.1-15
- 堀口和吉（1995）『「～は～」のはなし』 ひつじ書房
- 益岡隆志（1987）『命題の文法』 くろしお出版

- (2000)「属性叙述と事象叙述」『日本語文法の諸相』 pp.39-53、くろしお出版
- (2004)「日本語の主題—叙述の類型の観点から—」益岡隆志編『主題の対象』 pp.3-17、くろしお出版
- (2008)「叙述類型論に向けて」益岡隆志編『叙述類型論』 pp.3-18、くろしお出版
- 村上謙 (2002)「近世後期上方における「動詞連用形+や」について——連用形命令法と助動詞ヤルとの関連——」『国語国文』 71-6 pp.1-15、京都大学文学部国語学国文学研究室
- 村田真樹・黒橋禎夫・長尾真 (1996)「表層表現を手がかりとした日本語名詞句の指示性と数の推定」『自然言語処理』 3 (1) pp.67-81
- 森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の記述的研究』明治書院
- 八亀裕美 (2007)「日本語形容詞の文法」工藤真由美編『日本語形容詞の文法』ひつじ書房、 pp.53-77
- (2008)『日本語形容詞の記述的研究——類型論的視点から——』明治書院
- (2009)「形容詞述語文をとらえるために—分析に必要な視点」『国文学解釈と鑑賞』 74-7 pp.20-9

用例出典

- 国立国語研究所編 (2005)『太陽コーパス—雑誌『太陽』日本語データベース—』国立国語研究所資料集 15、博文館新社

1. 本論のまとめ

本研究では、ラレル文で表される自発・受身・可能の統一的な把握を目指して、ラレル形自発及び可能動詞による自発の特徴を様々な面から考察した。

まず第1章では、受身と自発というラレル文の二種の解釈について、他動性スケールに基づいた把握を試みた。この章では、自発の特徴についての言及はそれほど多くないが、統一的把握の可能性を検討する章として意義のあるものである。受身と、他動性の指標の一つである対象変化との間には相関が見られ、対象変化の程度を軸に、受身と自発は連続体を成すものとして捉えられる可能性を述べた。その一方で、他動性の指標である意志性を軸にすると、連続体としての把握は困難であることも確認した。対象変化の程度という指標は、統一的把握に有効である可能性が高いが、それを軸にするだけでは不十分であることから、意志性の高低・有無や、その他の指標を検討し、複合的に影響していると見るべきである。

第2章では、ラレル文の話し手に注目して、ラレル文各解釈の成立条件を分析した。〈経験者〉となる人物と、その格表示、話し手のイベントへの参与の仕方を整理し、成立条件とした。自発・可能は〈経験者〉が話し手であることが多く、文中で表示される場合は二格である。受身も、〈経験者〉は二格を取るが、話し手以外であることが多い。話し手は、イベントの影響を受ける存在として参与する。尊敬は、〈経験者〉がガ格を取り、話し手が〈経験者〉となったり、イベントに参加したりすることはない。これらの条件を侵しながらも成立するラレル文では、〈経験者〉が表示される割合が高まるということも確認された。

自発と受身を共通性のある連続体として捉えようとする、第1章で試みたように、他動性の指標に注目しがちである。しかし、他動性とは接点の無い「話し手」という概念もまた、自発・受身の分析に有効であることが明らかになった。

第3章では、ラレル文の自発・受身用法を決定付ける条件を考察した。一人称主体を取り、ル形で発話時現在を指すという表明・表出文となる条件を備えた思考動詞文においては自発、人称に制限がなく、ル形で未来を指す動作動詞として働く思考動詞文では受身が、それぞれ成立することを述べた。

他の動作動詞とは異なり、自発はある条件下において表明・表出文となる。この性質故、

ラレル形自発となるのは思考動詞が典型とされる。また受身文は、変化や〈対象〉への働きかけを述べるものである。ラレル形受身となる動詞の動きは、動作の発動だけでなく、時間的な幅のある事態を表す。動作動詞としての思考動詞がこの性質を持つからこそ、〈対象〉がどうなるかということ述べるラレル形受身の解釈も可能になる。従来の自発・受身に関する指摘とも矛盾しないことを確認した。

第4章では、可能動詞と、可能動詞による自発との関係を考察した。可能動詞はさまざまなタイプの可能を表すが、その中でも実現の有無を問題にしない評価的属性段階の可能と、実現したことを表す可能とに注目した。可能動詞による自発もまた、ラレル形の自発のようにル形で現在を指示し一人称を取るが、注目した可能動詞の性質と、これら可能動詞による自発の性質が共通することから、可能動詞の用法の多様化により、自発に解釈されるようになった可能性について述べた。

第5章では、『太陽コーパス』中の動詞「泣く」の様相から、可能動詞が自発の意味を表すようになった背景を考察した。動詞「泣く」は、動作動詞として事象を叙述し、文脈上唯一の存在である特定可能な人物を主体として取る傾向が見られ、小説というジャンルに偏って現れることを指摘した。可能動詞による自発を状態形容詞的であると把握すると、動詞「泣く」が小説において多用されることが背景となり、可能動詞が自発を表すようになったと結論付けた。また、自発の解釈がそれほど強くない可能動詞もあり、それは、特性形容詞的であると捉えられることも述べた。

第5章で考察の対象としたのはラレル形自発ではないが、可能との関わりを明らかにするためにも、可能形による自発について分析を行った。

2. 今後の課題

本研究に関する今後の課題として、以下のものが挙げられる。

- ・他動性スケール上に位置付けたラレル文諸用法の統一的な把握
- ・ラレル形自発と可能動詞による自発の相違点の考察
- ・可能動詞の諸用法の再検討

第1章で、他動性を表す指標を軸に、自発と受身を関連付けて把握することを試みた。

指標によっては有効であると考えられるが、把握が困難なものになってしまうこともある。他動性の一つの指標を軸にするのではなく、複合的に影響しているものと見て、統一的な把握を目指す必要がある。

そこで鍵となるのは、意志性であると考ええる。先行研究で、意志性を他動性の原型に含めるものもあれば（Paul J. Hopper and Sandra A. Thompson 1980、ウェスリー・M・ヤコブセン 1989）、無関係と見るものもある（角田太作 1991）。また、自発は動作主の非意図的な動きを表すとされるが、その場合の「意図性」と、他動性の指標としての「意志性・意図性」とにはどのような関係があるのだろうか。さらに、自発用法の実例の大半を占める思考動詞は意志性を持たない無意志動詞に分類される（杉本和之 1997）。そうすると自発は、無意志動詞による動きの非意図的な発生を表すことになるが、ここでも、意志性・意図性の関係が掴み辛い。漠然と捉えられてきた自発の「非意図的な動きの発生」について、今一度検討しなければならない。

他動性スケールを用いるのであれば、自発と受身が関連付けられる。その一方で、自発と可能を統一的に把握することも目指すべきであろう。第4章・第5章では、可能動詞による自発について考察した。ラレル文で表される自発と、可能動詞で表される自発との間には、一人称を取ることもヤル形で現在を指示すること等、共通点が見られる。しかし、助動詞（ラ）レルの古形（ラ）ルが元々表していた自発と、可能動詞が新たに意味するようになった自発とが、完全に同じ機能を持つとは考え難い。それぞれの自発の性質をより詳細に分析し、相違点を明らかにした上で、可能と自発との関連を探るべきである。

その際、自発だけでなく、可能動詞の諸用法についての再検討は欠くことができない。可能動詞の解釈として、純粋な可能、ラレル形自発に近いもの、そして、評価を述べ、自発にも可能にも解釈できるようなものが見られる。第5章で、可能動詞が表す自発を状態形容詞・特性形容詞と関連付けたが、可能動詞の用法を再整理することにより、より説得力を持つことになるかもしれない。

今後の研究方針として挙げられるのは、まず、他動性の指標を整理することである。そのためにも、自発が表す「非意図的行為」を含めた「意図性・意志性」の検討が重要であると考ええる。ラレル形自発・可能動詞による自発が表す事態内容を、他の用法との比較を通じて明らかにする。そして、ラレル形が表す自発・受身だけでなく、可能動詞による可能・自発も含め、それぞれの機能を整理し、統一的な把握を目指して研究を進めたい。

参考文献

- ウェスリー・M・ヤコブセン(1989)「他動性とプロトタイプ論」、久野暲、柴谷方良編『日本語学の新展開』くろしお出版 pp.213-48
- 角田太作(1991)『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 杉本和之(1988)「現代語における「自発」の位相」『日本語教育』66 pp.217-28
- (1995)「意志動詞と無意志動詞の研究—その1」『愛媛大学教養部紀要』28-3 pp.47-59
- (1997)「意志動詞と無意志動詞の研究—その2」『愛媛大学教育学部紀要』29-2 pp.33-47
- Paul J. Hopper and Sandra A. Thompson (1980) “Transitivity in grammar and discourse” *Language* 56

附記

本研究をなすに際し、日本語学研究室の釘貫亨先生、宮地朝子先生、また多くの方から懇切なご指導、ご教示を賜りました。記してここに厚く感謝の意を表します。

初出一覧

序論

書き下ろし

本論

第1章：他動性スケールにおける受身・自発の位置づけ——対象変化の程度と意志性に注目して——

「思考動詞ラレル文の自発・受身の分化条件 動詞の時間的展開とラレル文諸用法との相関の可能性」

平成22年度博士課程（後期課程）単位認定論文に加筆・修正をした。

第2章：ラレル文多義解釈の成立条件——思考動詞主体〈経験者〉・格表示・話し手の相関——

「ラレル文多義解釈の成立条件——思考動詞主体〈経験者〉・格表示・話し手の相関——」

『名古屋大学国語国文学』第103号 pp.212-196 名古屋大学国語国文学会(2010)

第3章：自発・受身の成立条件——思考動詞ラレル文ル形のテンス的意味に注目して——

「自発・受身の成立条件——思考動詞ラレル文ル形のテンス的意味に注目して——」

『Nagoya Linguistics（名古屋言語研究）』第6号 pp.55-65 名古屋言語研究会(2012)

第4章：可能動詞による自発表現——可能動詞の意味分化を契機として発生した可能性について——

「可能動詞による自発表現 可能動詞の意味分化を契機として発生した可能性について」

平成26年度博士課程（後期課程）単位認定論文に加筆・修正をした。

第5章：可能動詞「泣ける」による自発表現——太陽コーパスにおける「泣く」の観察か
ら——
書き下ろし

結論
書き下ろし